

Flapping to the World



福岡県青年海外協力隊を支援する会40周年実行委員会

ごあいさつ～「設立 40 周年記念事業」に寄せて

福岡県青年海外協力隊を支援する会

会長 遠藤 恭介

私たち「福岡県青年海外協力隊を支援する会」は、昭和 53 年 4 月の設立以降、会員の皆様を支えられ、海外協力隊員の活動を充実させる為の県民運動を、鋭意展開して参りました。



ご承知の通り、この間にインターネットを始めとする情報通信網の発達、AI 技術の急速な発展等により、世界は大きく変化しお互いの距離を縮める一方、度重なる地域間の紛争やテロ、気候変動や環境汚染、複雑化する経済摩擦等により、国際社会を取り巻く状況はますます混迷を深め、厳しさを増しています。また、国内に目を向けると、グローバル化の進展やインバウンド、外国人労働者の増加等により、日常生活の中で他国の人々が身近な存在となりつつあり、我々一般市民が異なる文化と接触する機会が、これまで以上に増大しています。

このような中であって、「JICA 海外協力隊」は今も世界の各地で、様々な職種の隊員たちが、開発途上国の抱える喫緊の課題解決に向けて、現地の人々と手を携えながらともに汗をかき、昼夜を分かたず懸命に活動を続けています。派遣された国と職種は異なっても、隊員たちが切望する共通の願いは、世界から飢餓と貧困をなくしたい、すべての人々に安全な水と医療、健康と福祉、平和と公正を行き渡らせたい、ということなのです。

こうした隊員たちの願いは、2015 年 9 月に国連本部に於いて採決された「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」に掲げられた目標「SDGs※」と正に合致するものであります。

※Sustainable Development Goals

私たち支援する会は、設立から 40 年を過ぎた本年、海外協力隊員の活躍や奮闘と当会の行う事業を広く社会に知っていただき、国際協力への支援の輪が更に大きくなることを祈念して、「設立 40 周年記念事業」を実施します。これを契機に持続可能な世界の実現に向け、今や世界の共通目標となった「SDGs」の飛躍的な前進に呼応しながら、「JICA 海外協力隊」の長年に亘る願いを実現させるべく、さらなる事業の拡大・発展にと決意を新たに致したところです。

今後とも引き続き、絶大なるご支援・ご協力を賜りますよう、切にお願い申し上げます。

福岡県からは、これまで 2,000 名を超える方々が海外協力隊員として派遣され、現在も数十名が現地で活躍しています。この記念事業を通じて、福岡県民の皆様にも「JICA 海外協力隊」の活動を広く知っていただくこと、また「支援する会」が行う活動支援に、ご理解とご協力をいただくことが出来ればと切に念じますとともに、海外協力隊の隊員同士、並びに家族間の絆が更に強まることを願って止みません。

本事業は 3 月に予定していましたが、新型コロナウイルス感染症の影響で、やむなく 9 月に延期を致しました。イベントを楽しみしていただいた皆様、ご支援ご協力いただいた出演者・協賛企業の方々には、大変ご迷惑をお掛けして申し訳ありません。

この度、晴れて 40 周年の記念事業を取り行うことが出来る喜びを、改めて皆様方と分かち合いたいと思います。

「福岡県青年海外協力隊を支援する会」40周年記念事業

知事祝辞

福岡県知事
小川 洋

「福岡県青年海外協力隊を支援する会」の設立40周年を心からお祝い申し上げます。これまで会の運営にご尽力されました遠藤会長をはじめ、役員・会員の皆さまに深く敬意を表します。

国際社会は今、環境、食糧、人権といったさまざまな問題に直面しています。こうした中、JICA 海外協力隊は、言葉、環境、気候の異なる国や地域に派遣され、多くの困難を乗り越えながら、日々懸命に活動されています。この協力隊の活動は、開発途上国の発展や復興に貢献するとともに、コミュニケーション力や異文化適応力などのグローバル人材としての素養が培われることから「世界と日本を元気にする」事業として注目されています。本県からは、これまで2000人を超える方々が派遣され、帰国後も、本県の国際理解の推進、国際人材の育成に大いに貢献していただいています。



支援する会の皆さまは、1978年の設立以来、協力隊員の支援だけでなく、隊員の留守家族との交流や隊員の帰国後の就職相談、隊員相互のネットワークの強化など、多方面から支援されています。協力隊員が全力で活動に専念できるのも、皆さまの支援があるからこそだと思います。本県としても、皆さまの活動に今後とも協力してまいります。そして、国際協力活動への理解と支援の輪がより一層広がることを期待しております。

ご挨拶

独立行政法人国際協力機構
青年海外協力隊 事務局長 小林 浩幸

この度は、「福岡県青年海外協力隊を支援する会」の皆様におかれましては、設立40周年を迎えられましたこと、心よりお慶び申し上げます。また、JICA ボランティア事業への長きに亘る多大なご貢献に心から感謝致します。

貴会の設立年である1978年は、南米（パラグアイ）に初めての隊員が派遣された年です。そしてその翌年には駒ヶ根訓練所が開設しました。まさに黎明期から皆様に支えられ、育てていただいた本事業は、これまで90カ国以上の国で累計派遣人数が5万人を超え、2016年には青年海外協力隊が「ラモン・マグサイサイ賞」を受賞しました。



この40年間で取り巻く環境は大きく変化しました。中でも2015年に国連が発表した持続可能な開発目標（SDGs）は新しい国際協力の幕開けでした。東西でも、南北でもない、世界の国々が皆共通のパートナーとして共に手を取り合うアプローチは本事業の普遍的価値に通じます。そして2019年4月の入管法改正に始まる我が国「第二の開国」は、海外協力隊の途上国での貢献に加え、帰国後に国内のグローバル化や共生社会実現に向けても活躍の場が拡大する契機です。

世界も日本も常に変化する中で、貴会に支えられている本事業が、その普遍的な価値を維持・拡充しつつも、いつも時代のニーズに基づき時代をリードする事業とすべく全力を尽くして参ります。何卒、引き続きのご支援を賜りますようお願い致します。皆様の益々のご発展とご健勝をこころからお祈りいたします。

目次

あいさつ

～「設立40周年記念事業」に寄せて～

福岡県青年海外協力隊を支援する会

会長 遠藤 恭介 … 1

祝辞

福岡県知事 小川 洋 … 2

独立行政法人国際協力機構 青年海外協力隊
事務局長 小林 浩幸

記念式典当日プログラム … 4

JICA海外協力隊員たちの声 … 5

東南アジア(8名) … 7

東アジア、中央アジア、南アジア、中東(6名) … 13

南米、中米・カリブ、大洋州(12名) … 19

北アフリカ、東アフリカ(10名) … 27

中部アフリカ、西アフリカ(4名) … 35

南部アフリカ(8名) … 39

福岡県青年海外協力隊を支援する会活動紹介 … 45

独立行政法人国際協力機構(JICA)九州センター活動紹介 … 46

福岡県青年海外協力隊を支援する会 「設立 40 周年記念式典」

2020 年 9 月 13 日 (日)

式典：11:00～12:30 エルガーラ多目的ホール
JICA海外協力隊写真展：10:00～17:00 パサージュ広場

福岡県青年海外協力隊を支援する会では、設立40周年を記念して記念式典およびイベントを開催いたします。

設立 40 周年記念式典および事業説明会

会場：エルガーラ多目的ホール

11:00～12:30

設立 40 周年記念式典

来賓あいさつ他
功労者表彰
JICA 海外協力隊帰国隊員報告

14:00～16:30

JICA 海外協力隊事業説明会

海外協力隊概要
帰国隊員報告
個別相談会

JICA海外協力隊写真展

～Flapping to the World from Fukuoka～

2020 年 9 月 13 日 (日)

10:00～17:00 博多大丸・パサージュ広場(申込み不要)

同時開催イベント

JICA海外協力隊の活動をとおして世界を知ろう!

★福岡県出身のJICA海外協力隊員の活動紹介

★世界の雑貨などの販売

★JICA海外協力隊 質問・相談コーナー(協力隊ナビ)

★スタンプラリー



※プログラムにつきましては変更になる場合があります。

JICA海外協力隊員たちの声

この度は福岡県青年海外協力隊を支援する会（以下支援する会）の設立40周年誠におめでとうございます。私たちJICA海外協力隊員は、支援する会の皆様の温かいお心に支えられ、環境が日本ほど整っていない開発途上国という派遣国で2年間の活動を全うすることができております。この場をお借りして御礼申し上げます。この寄稿エリアは、支援する会の設立40周年にあたり、協力隊員として何ができるか。を考えた時に、今、現地で活動しているJICA海外協力隊員の生の声や2年間の任期を終え、日本へ帰国し、日本や世界で協力隊経験を生かしているOV達の声をお聞きいただき、国際協力やJICA青年海外協力隊の更なる発展に、そして、支援する会の大きな飛躍へのお手伝いができるのではないかと考えて企画したものです。現在まで2000人を超えるJICA海外協力隊員を福岡県より送り出し、今も100名近い福岡出身の協力隊員が活動しております。帰国後も、支援する会の皆様には色々とアドバイスを受れたり、交流を持っていただいたりしながら、日本社会に貢献できるように日々研鑽しているところです。是非是非、各地で活動しているJICA海外協力隊員のメッセージを読んでいただきたく思います。

北アフリカ・東アフリカ

エジプト	幸田 圭二	太郎良光男	
エチオピア	竹内 詩絵		
ケニア	田中 健一	小林 礼奈	竹崎万里子
タンザニア	岡本 翔太		
マラウイ	上田 啓介	柿原 莉沙	
ルワンダ	鹿毛 謙作		

東アジア・中央アジア・南アジア・中東

ウズベキスタン	富田 睦美		
キルギス	菊本 圭祐		
ネパール	宮本 春香	林 明寿佳	
モンゴル	野口 浩		
ヨルダン	鬼木 一馬		

中部アフリカ・西アフリカ

ガボン	一木 奈江	井上 雅子
ベナン	田中 智裕	馬込 清太



南部アフリカ

ザンビア	原 隆	梶原 輝史	下野 未希
	待鳥 正和	石山 祐子	
ボツワナ	安部 喜敬		
モザンビーク	木原 麻希	古賀美乃里	

東南アジア

インドネシア	本田 晴己			
カンボジア	赤石 維衆	小柳 真裕	深町 菜摘	
タイ	濱崎 優磨	池田 美沙		
マレーシア	森下 正人	高木由加里		



JICA海外協力隊

日本政府が実施する国際協力の一つで、20歳以上65歳未満の日本国籍を持った方々を開発途上国に2年間派遣し、日本の技術を現地に広め、現地の発展の一役を担うという活動である。JICA海外協力隊には、青年海外協力隊、シニア海外協力隊（特定の技術が必要とされるもの）、日系社会ボランティア（日系社会に特化した協力隊員派遣）、日系社会シニアボランティア（日系社会に特化した特定の技術が必要とされるボランティア）がある。

名前の横に記載の派遣隊次「○○○○年度○次隊」とは

JICA海外協力隊は年間3回派遣されている（過去には年間4回派遣された時期もある）。よって、派遣年度の何回目に派遣されたかというので、それぞれのグループをわけている。例えば、2000年度の2回目の派遣は「2000年度2次隊」となる。派遣国の政情不安やテロなど、緊急事態により、派遣国が変更になった隊次は1～4次に収まらず、その例外の隊次になることもある。

南米・中米・カリブ、大洋州

コロンビア	小田 哲也	長方 舞香	
パラグアイ	小田 翼	畑中 遥	濱渦 華子
ブラジル	伊取 成貴	井上 藍	
ペルー	堤 理加		
ボリビア	笹尾 眞統		
セントビンセント及びグレナディーン諸島		鳴滝 綾乃	
パナマ	柴田 道世		
フィジー	鐘ヶ江美幸		



インドネシア

本田晴己

(2017年度4次隊 水球)

皆様初めまして、福岡市出身の本田晴己と申します。私は関東の大学を卒業した2017年、青年海外協力隊に応募しました。現在ではインドネシアにて水球の指導と普及活動をしています。活動拠点はジャカルタをメインとし、代表選手も含めたインドネシア全土のチームを指導しており、近い将来オリンピックに出場するという目標のお手伝いをしています。

日本とは文化も言語も違う中、初めは手探りでしたが、新しい風を吹かせてやろうと、がむしゃらにコミュニティーの中に溶け込んでいきました。問題は山積みでしたが、私がインドネシア選手とコーチに求めた一番の変革は「考える習慣をつける」ことです。私が赴任した当初は、ミスをした選手はなぜミスをしたのか考えないし、コーチもそれを考えさせようとせず頭ごなしに叱るだけでした。逆に良いプレーをしても選手はなぜ成功したのか分からず、コーチも手をたたいてほめるだけでそこに根拠の提示はありませんでした。これではイレギュラーな状況に的確な対処をとることができませんし、プロセスが無いのでフィードバックもできません。

この状況を変えるべく、時間がかかることは承知の上で、私は事あるごとに選手とコーチに問いを投げかけてきました。もちろん簡単ではないので時にはぶつかることもありすし、「HONDAは何を細かく問いかけて時間をかけているのか」と白い目で見られることもありましたが、それでも集団に対して指導するだけではなく、個人との対話を繰り返し行うことを諦めませんでした。

活動が1年を過ぎた頃に彼らに少しずつ考える習慣がついてきました。その証拠として選手やコーチから頻繁に質問を受けるようになりましたし、私の問いに対しても彼らなりに考えて返答するようになりました。人間は「考えてなんぼ」ということを次世代の若者にも伝えてもらって、近い将来インドネシアのチームがオリンピックに出場できることを心待ちにしています。



カンボジア

赤石維衆

(2000年度3次隊 水質検査)

カンボジア H12-3、水質検査の赤石です。カンボジアのプロンペン市水道局に派遣されていました。水質分析方法や水質データの解析方法などを現地で指導していました。隊員時代はコミュニケーションを取るために、守衛さんとタバコを吸ったり、浄水場の運転員さんとよく酒を飲んだりしていました。おかげで、帰国後数年して新婚旅行で再訪したときは、結構覚えてくれていて、顔パスで浄水場に入ることができました。

帰国して10数年後に、日本でカンボジア農村水道ビジネスをやろうとしていた会社に、技術アドバイザーとして関与しましたが、その時も古株の方は結構覚えていてくれました。結局断念しましたが、農村で浄水装置を作り、運営コストに農作物の販売を当てるといった画期的な考えでした。農村は首都と異なり、水の汚染問題というより、乾季に水自体が減少するという状態でした、正直お手上げでした。

このようにカンボジアでの体験は私に貴重な経験や考えを与えてくれて、今では、副業で水技術士事務所を持っています。

水は人間の生活に不可欠なものです。日本には豊富な水資源がありますが、カンボジアではそうではありません。まさに日本の常識はカンボジアでは通用しない、という国内外の差異を見せられた気分です。このような貴重な経験を与えてくれた協力隊に感謝です。若い時に決心しなければ、比較的大手の会社でそれなりのキャリアを積んでいたかもしれませんが、つまらない道を歩んでいたかもしれません。その時は河川だけでしたが、帰国して、更に浄水器、排水処理と歩いてきて、水全般のことを知ることができました。それもあの時の決心があつてのことと思います。

若い（自分ではまだ若手と思っていますが、十分中年）人たちに経験するなら今しかないといいたいですね。





私にとって協力隊派遣は、人生の分岐点でした。協力隊に応募したきっかけは、職場にいた推進員と仲良くなったから。合格通知とともに知らされた派遣国・内容は、希望していたものとは全く別物。けれど、この派遣がなかったら、そして派遣先がカンボジアではなかったら、今歩んでいる人生とは出会えていませんでした。

その理由は大きく2つ。ひとつめは、人生のパートナーを得たこと。派遣前に出会った彼は、タイに移住しようとしていました。けれど、私のカンボジア派遣を知り、彼もカンボジアへ。私にとって東南アジアは希望していなかった派遣先。もし希望通りの国へ派遣されていたら、2人の未来はそこで途絶えていました。

ふたつめは、その彼がボランティア先で仲間を見つけ、カンボジアの移動手段であるトゥクトゥクを購入、トゥクトゥクシアターという、村で映画を上映する活動を開始したこと。そこから発展し、任期終了後は2人でTukTuk(トゥクトゥク、カンボジアでは Rermork for Children) という幼児教育支援をする団体を運営しています。

派遣先のカンボジア・ポーサットは、首都からも主要の観光地からも遠く、国道は通っているものの陸の孤島。任期終了後、カンボジア国内での拠点を変えるかという話も出ましたが、協力隊時代にできた人とのつながりは、そんな立地条件とは比にならないくらい尊いものでした。

TukTukの活動は私がもともと興味があった幼児教育分野。公立幼稚園への移動図書・おもちゃ館をはじめ、教員へのワークショップやオンライン教材の開発に力をいれています。協力隊の時と関わる課は違えど、同じ教育局の管轄なので、協力隊だった頃に築いた教育局ネットワークで、幼児教育課の方々によくしてもらい、ポーサット内でスムーズに活動させていただいています。

カンボジア・ポーサットは、一生、私たち夫婦の原点です。



「任国、任地で活動していて感じたこと、感動したこと」

先日、一時帰国をして約1年ぶりに日本を味わってきました。久しぶりに会う友人たちに聞かれたのが「カンボジアの子どもって日本の子どもより素直でキラキラした顔をしているの?」という質問でした。

日本で先生をした後にカンボジアで先生をして感じたこと、それは日本の子どももカンボジアの子どもも、同じ子どもだということです。珍しいものや興味のあるものをみた時の子どもたちの顔は、国なんて関係ありません。キラキラしています。ただ日本では珍しくないものが、カンボジアでは珍しいものであることが多々あるだけです。

例えば運動会。日本では恒例の学校行事ですが、私の任地では1度も運動会がされたことはありませんでした。そこで、私は初めての運動会開催に取り組みました。友達を全力で応援すること、勝つために全力になること、負けて悔しくて涙すること、きっと珍しいことのオンパレードであったのではないかと思います。私は運動会で子どもたちが見せてくれたとびっきりの笑顔をおぼろげに忘れることができません。

そして図工の授業。カンボジアには図工という科目はありません。子どもたちに自分で考えて考えたことを表現する力を身に付けて欲しいという思いで、図工の授業にも取り組んでいます。1人に1つクレヨンを貸してあげると大喜び。初めて使う絵の道具に大はしゃぎ。お手本の絵をそっくりそのまま描くことしかやってこなかった子どもたちが、自分の思うままに作品を作ってくれる姿はとても嬉しかったです。

子どもたちは楽しいものが大好きですし、興味をもってもらえるように授業を少し工夫すれば、子どもたちの顔はキラキラしています。それは日本もカンボジアも同じです。しかし、カンボジアの先生たちの中には、授業を工夫する余裕ややる気のない人がいるのも事実です。少しの工夫でいつもの授業はきっと珍しい授業になり、子どもたちのとびっきりの笑顔が見られることを、残りの任期で伝えていきたいです。





タイ

濱崎優磨

(2018年度2次隊 マーケティング)

私は、タイのサケオ県コミュニティ開発局に所属し、タイ政府が推奨している OTOP（一村一品）プロジェクト促進活動に携わっています。サケオ県は、首都バンコクから東へ200キロ程の距離に位置しています。県内にはアンブーン（Sub-district）が9箇所あり、それぞれのアンブーンにタンブーンという村が県内全部で57箇所、そして更に枝分かれしたムーバーンという、地域住民が集合する日本で例えるならば公民館のような集落単位が県内に712箇所存在しています。このムーバーンの地域特産品を開発、生産、販売することで、地域住民の収入向上を図ることが OTOP プロジェクトの狙いです。

青年海外協力隊員としての私のミッションは、OTOP プロジェクトのマーケティング職として販売促進や販路拡大をすることです。地域住民の方々を知るために、赴任後から6ヶ月間は、タイの文化、歴史、宗教などの理解と人間関係の構築に時間を費やしてきました。サケオにあるお寺への出家も経験しました。

OTOP 製品を制作するムーバーン（村）数ヶ所訪問・滞在する中、4ツ星ランクを獲得して、タイ国際航空の機内販売にも採用されている製品を発見した。その製品はボールペンに細く割いて色づけした竹を編み込んで、様々なデザインを出すという竹細工品です。この製品に魅力を感じて、現地生産者の意見を重視しながらマーケティング戦略を立案し、販売力を高めて生産者の収入を向上させることを活動目標としました。現状で製品価値を高めるためのツールが不足していると感じ、作業工程や生産者の OTOP 製品に対する思いなどを取材して動画編集し、販促ツールとして活用しています。また新たな販路開拓として、在タイ日本人会チャリティバザーへの出店や JICA タイ事務所での出張販売を行い、今までには無かった日本人向けの販売チャンネルを確立することが出来ました。地域住民の方々も大変喜んでおり、今後も更に売上に貢献したいと考えています。



タイ

池田美沙

(2018年度3次隊 栄養士)

「仲間とともに過ごした日々」

みなさん、こんにちは。

タイ国東北部のコーンケン県に派遣されている池田と申します。

私の派遣先は病院で、日本と同様に365日1日3食患者さんに食事を提供しています。タイは果物やハーブ類の種類が豊富で、病院の厨房は、唐辛子や各種ハーブの香りや、色とりどりの旬の果物でいっぱい、とても恵まれた環境で生活しています。

派遣されて、間も無く1年が経とうとしていますが、私が着任して1ヶ月経ったある日、突然カウンターパート（以下 CP）と呼ばれる「活動の相棒」が退職しました。その時、まだ着任して1ヶ月だったので、私が任地に派遣されてきた目的が分かっているのが CP と他数名しかいませんでした。そんな中、その CP が退職し、「この後、私はどうなるの?」と悩んでいて、とりあえず何かをしなければと思い、思いつくものは何でもいいからやっていました。そのとき「ミサは何をしにきたの?」と言われ、ああ…ここには私が来た目的を理解してくれる人はいないのだと、かなり落ち込んでいました。

しかし、そのまた1ヶ月後の着任2ヶ月目。タイでソクラーンと言われるお祭りがありました。そこで、とあるコンテストがあったのですが、厨房の方々にタイのドレスを着せてもらい、お化粧もしてもらい、靴まで用意してもらって、本当に楽しい時間でした。活動もなかなか進まずここにいるのかと悩んでいた時だったので、なんだか仲間に入れてもらい、嬉しい気持ちでいっぱいでした。写真はその時のものです。

そこからは、少しずつタイ語の語彙も増え、会話も少しずつできるようになり、先日は日本のイベント第2弾を病院で行い、厨房の皆とともに、寿司などの和食を作りました。この時、はっきりと一人で活動を進めていたという印象が皆で進めているという認識に変わりました。

残りあと1年。体調に気をつけながら、素敵な仲間とともに過ごす日々を楽しみながら、活動を進めていきたいと思います。





マレーシア

森下正人

(2011年度3次隊 廃棄物処理)

「サラワク川で魚釣り大会－旧友との変わらぬ交流－」

私は、北九州市役所を定年退職した後、2011年（平成23年）10月から2年間、シニアボランティアとしてマレーシア国サラワク州資源環境審議会（NREB）に赴任して、排水処理管理（廃棄物処理）の活動を支援しました。帰国後は、北九州市で活動するNPO法人「紫川を守る会」の顧問を務め、国内外の環境関連団体と協働して地域の自然保護や環境保全を目的として様々なボランティア活動を行っています。

それらの中で、帰国後もNREBや現地の親しい友人との交流を継続して、毎年のようにサラワク州クチン市を訪問して、環境ボランティア活動を続けてきました。

なかでも、2016年6月には私がNREBで活動していたことがきっかけとなり、紫川を守る会とNREBは「環境友好協定」を締結することになり、サラワク州の自然保護・環境改善で協働してきました。

これらの活動実績として、2016年にはクチン市バコ村における「廃棄物リサイクルセンター」の設立に際し、技術及び財政的な支援を行いました。現在では、地域住民の手により、適切な維持管理を行い、良質の生産物（生ごみから堆肥、廃油からロウソク等）を販売することが出来るまでになりました。また、最近では、2019年8月、当会は、NREB、クチン市役所との共催で「サラワク川・市民魚釣り大会」を実施し、旧友たちと協力して、市民に対する自然保護・環境啓発活動を行いました。

今後とも、微力ながら、サラワク州の自然保護・環境保全活動に寄与していきたいと考えています。



マレーシア

高木由加里

(2018年度2次隊 ソーシャルワーカー)

「マレーシアの多様性の中で生きる」

福岡の皆様アパカバル？（マレー語でお元気ですか？）

私は現在マレーシア、ボルネオ島のサラワク州ピントゥルという町で活動しています。辛い物が、現地人より強くなりつつある今日この頃です。

マレーシアはマレー系、中華系、インド系の主に3つの民族から成る多民族国家で、食文化も多彩です。私の住むサラワク州は、さらにイバン族を始めとした先住民族が多数派を占める地域です。マレーシアとはお互いの民族が距離感を保ちながら共存している世界です。

私の活動内容は精神障害者の就労支援です。精神疾患のために仕事を失った人達や、社会に出ることが難しい人達の就労先を見つけ、彼らが自立した生活を送ること、地域社会の一員となることを目的としてサポートしています。日本においても精神障害者に対する偏見は根強く、就労支援もまだまだ黎明期。この偏見はマレーシアにおいては更に根強いと感じており、活動は想像以上に苦勞していますが、試行錯誤しながら日々奮闘中です。

初めは、マレーシアはのんびりゆったりしていて、日本に比べて何もストレスがなさそうなのに、そんなに精神疾患の人がいるのだろうかかと半信半疑でした。しかし、どんな国でもその国特有の生き辛さを感じている人はいて、一概に比べることができないものだと痛感しています。

ところで、マレーシアで驚いたこと。それは語学力と歌唱力！タクシーのおじちゃん達もみんなちょっとした英語ならしゃべれます。人によっては母語に加えて更に2か国語しゃべれる方も。またお家カラオケが割と普通にあり、集まりがあるたびにみな歌います。日本人の私はKiroroの“未来へ”を歌わされるのが常です。歌や言語は民族の壁を超える大切なツールだなと感じています。

マレーシアという国の多様性の中で、時に意見がぶつかることもあるけれど、文化が違うからこそ得られること、今までと違う発想やアイデアが、お互い生まれるといいなと思いつつ活動しています。



いつもの朝と、 新しい明日を。



いつもと同じふつうの一日を、
だからこそ大切に愛おしい一日を、
しっかり守り支えること。

まだ誰も知らない、
待ち遠しくてワクワクするような、
明日をつくりだすこと。



私たち西部ガスグループは、
新たなスタートラインに立っています。
街中のいろいろなところで、
様々な仕事を通じて、
人と街に元気と笑顔を届けてまいります。

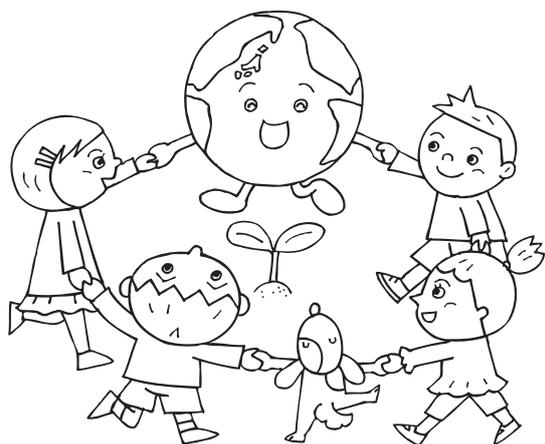
いつもの朝と、新しい明日を。

西部ガスグループ



 西部ガス

わたしたちは未来の子どもたちのために
低炭素社会をめざしています。



西部ガスエネルギー株式会社

代表取締役社長 **金井 昌道**

本 社／福岡県糟屋郡粕屋町駕与丁1-5-1
TEL.092-939-5211 (大代表)

福 岡／福岡特約販売部、福岡東支店、和白営業所
福岡西支店、福岡南支店、福岡北支店、
北九州支店、朝倉営業所、鞍手充填所

熊 本／熊本支店、熊本北営業所

長 崎／長崎支店、佐世保支店、
長崎中央営業所、佐世保北営業所

<https://www.sg-energy.co.jp>

FFG ふくおかフィナンシャルグループ

あなたのいちばんに。

いちばん身近な
いちばん頼れる
いちばん先に行く

ブランドキャラクター
「ユーモ」

 **福岡銀行**





ウズベキスタン

富田陸美

(2017年度3次隊 理学療法士)

Ассалому алайкум! (アッサローム アレイクム)

シルクロードの交差点、中央アジアのウズベキスタン共和国で、理学療法士として活動している富田陸美と申します!

この国は旧ソビエト連邦から独立して28年の若い国です。中央アジアの真ん中に位置し、周りを全て陸の国境で囲まれている二重内陸国です。ウズベク系、ロシア系、韓国系、…と様々な民族が生活しており、地方によりウズベク語、ロシア語等、様々な言語が話されています。宗教は大多数がイスラム教ですが、飲酒も可能であり、中近東諸国に比べるとあまり厳格ではない印象です。前述の通り海がないので、魚介類は高価で手に入りにくいですが、National food が美味しくお米も日常的に食べられているので、食生活は特に困りません(少々…いや、かなり油っこいですが…)。

さて、私は首都タシケントの2カ所のリハビリテーションセンターで活動しています。私は患者様への個別リハビリ、家族や同僚への知識面・技術面での助言、リハビリマニュアルの作成等を行っています。こちらには、理学療法士という資格制度がないため、マッサージの短期講習を受けた看護師がリハビリを行っています。そのため、私が日本で学んできた医療知識・技術とは大分違いがあります。初めは驚く事も多々ありましたが、社会的・歴史的な背景を知る事により、私自身もこの国ならではの医療の在り方を学んでいます。また、日本の医療知識・技術を患者様や同僚に伝えることで、患者様の選択肢を増やし、医療の質の向上や、患者様の生活の質の向上に繋がれるように励んでいます。

プライベートでは、同僚や現地人の友人に支えられながら、楽しく過ごしています。とてもフレンドリーな方が多く、頻繁に誕生日会や結婚式などに呼んでいただいています。近年、日本でも「おもてなし」が話題となりましたが、真のおもてなし国家は、ウズベキスタンなのではないかと密かに思っています。

そんなこの国に2年間関わる事ができて、かけがえのない時を過ごせました。この国に生活する人々の更なる幸せを願います。Омад бўлсин!



キルギス

菊本圭祐

(2018年度1次隊 バレーボール)

現在、キルギス共和国で活動中の菊本圭祐と申します。

2018年7月に赴任し、首都ビシュケク市で活動しております。職種はバレーボールです。

簡単ではございますが、私が赴任している国と自身の活動について紹介させていただきます。

赴任国は1991年ソビエト連邦崩壊後、国名をキルギス共和国としました。人口は日本の約20分の1の600万人、面積が日本の約半分の小さな国家です。かつてソビエト連邦であったことも影響し、キルギス語とロシア語の二言語が話されています。ビシュケクの町並みはソ連時に建てられた立派な建物が建ち並び、日本と同様大きなショッピングモールや24時間営業の商店、お酒落カフェなどがあります。町の至る所にバザールという市場があり日用品はすべてそこで揃い非常に便利です。また、肉、野菜、フルーツはとても新鮮で、低価格で購入することができ、大きな不便を感じることなく、むしろ快適な生活を送る事が出来ています。

私はビシュケク市の国立スポーツアカデミーで勤務しています。ここは国内唯一の体育大学で約1800名の学生が在籍しており、彼らは将来体育教師やスポーツコーチ、軍隊を目指すための教育を受けています。主な活動としてはバレーボールのクラブ活動を担当し、専攻学生に対し技術やルールの指導を行っており、本競技において学生自身の競技パフォーマンスを向上(クラブ活動の質的向上)させることに注力した取り組みを行っています。そして将来的に本競技の指導者になりうる学生に対し、幅広い知識を正しく教育し、結果としてこの国においてバレーボールのさらなる活性化に繋がればと考えております。

キルギスの生活も残りわずか。この国の人たちと一緒に学び、互いに成長出来るよう取り組んでいくとともに彼らが人間性や協調性を学び、将来、健康で活力のある自立した生活を送れるよう引き続きサポートして参ります。





「任国でのエピソード」

私はネパールの首都カトマンズから車で2時間ほど東に位置するパナウティという市に配属されています。職種は環境教育で、現在は市内の学校を巡回して、環境に関する授業を行ったり、女性グループにコンポストの作り方を指導したり、不用品をリサイクルして新たな物を作り出し、収入向上に繋げるといった活動を主に行っています。少しでもパナウティの街が美しくなるように、自分に出来る事を探しながら、日々、奔走しています。

10月にはネパール最大のお祭り、ダサインがあり、そのダサインが終わるとティハールというお祭りがあります。ティハールは5日間行われ、様々な生き物（犬や牛）や物（ほうき）にマリーゴールドの花輪を捧げ、額に赤いティカを着けます。最終日は自分の兄弟にティカを捧げる日です。既婚の女性は皆、贈り物を持って実家に帰ります。私も近所の仲良しのディディ（お姉さん）と一緒にディディの実家に行きました。ディディの弟達にティカを着け、花輪を掛けてあげました。この儀式を行うと家族の一員になるらしく、「あなたも今日から私達、家族の一員だよ」と言われたことに驚いたと同時に嬉しかったです。これだけではなく、ディディはいつも「あなたは私の娘だよ」と言ってくれます。会うといつでも「ごはん食べたか？チア（お茶）飲んだか？」と心配してくれます。ネパールでは年下の女性に対して「バヒニー」と呼びます。他にも愛情を込めて「ナニー」と呼ぶこともあります。いつも私の事を「ナニー」と呼んで可愛がってくれるディディのお陰で、活動に躓いても、日本に帰りたくなくても、ネパールで頑張れています。

これからもネパールでの人との出会いを大事にして、様々なことに積極的に参加し、経験して、「環境教育」の活動に繋げていきます。めげず、悔やまず、落ち込まず、残りの任期も精一杯、頑張ります。



ネパールは南アジアに位置する国で、アジアではアフガニスタンの次に貧困とされる国です。ただ、貧困に比べて、飢餓が少ないのもこの国の特徴です。朝、職場に行くと「ナマステ」日本語でいう「こんにちは」の後に、「カナカヨ？」と皆、聞いてきます。意味は「ご飯食べた？」です。そして、私に初めて出会った人が必ず聞く質問に「ご飯は自分で作って食べるの？それとも、外で食べるの？」があります。ネパールでは、お腹が空いていないということはとても重要なことです。家にお客さんが来たときは、「おなか一杯にして帰す」という文化があります。「もう、食べられない!!」といっても、「もう少しだけ食べられるよ。」と言って、山盛りのお替りをお皿に入れようとします。そんなところからも分かるように、人がとても親切で、優しく、ご飯がとても美味しい国です。

私はそのネパールの中央部に位置する、スンドルバザールという小さなまちの市役所で活動をしています。スンドルバザールとは、ネパール語で「きれいな市場」という意味です。その名の通り、ヒマラヤ（雪の積もった山）が見えるきれいなまちです。私の仕事は、学校や地域を回り環境・公衆衛生の促進のお手伝いをする事です。ここに来て、2ヶ月ほどが経ち、やっと、まちのことやここに住む人々のことが少しずつ分かるようになってきました。活動自体は、まだまだ始まったばかりです。学校に行き、今後行う授業の準備をしたり、地域を回って、地域の人々と話をし、調査を行っています。これから、ここに住む皆さんと今後につながる活動ができたと思っています。

<出典>IMF - World Economic Outlook Databases (2019年10月版)





モンゴル

野口浩

(2005年度1次隊 耐震建築)

「シニア海外ボランティアに参加して」

海外ボランティア活動に参加したのは67歳も間近な時でした。ラストチャンスだと思って応募しました。

今では思い出の多くが記憶から遠ざかり、懐かしさだけになりました。

私たちに求められたのは、我が国と派遣国との技術協力の推進並びに両国の友好親善に努めることでした。加えて、帰国後はボランティア経験を社会に還元することでした。

着任当初は見ることも聞くことも、驚きの連続で、新鮮といえば聞こえは良いのですが、うかうかしていると、あっという間に時間が経ってしまうという現実がありました。半年が過ぎて現地に馴染み、一年過ぎてやっと同じ職場の一員として認められるというのが実感でした。その後は、皆さんの協力を得て活動に邁進することが出来ました。

派遣国で皆と交わって驚いたことの一つは、女性の自立心の旺盛さと事を処するにあたっての意欲と活動力の素晴らしさでした。私の学ぶところは多く、帰国後直ちに福岡県男女共同参画審議会委員に応募し、通算四年間一委員として微力を尽くしました。

蛇足ですが、かの地では、夕暮れ時になると、あちらこちらで、「エイジ!エイジ!(お母さん!お母さん!)」の声が聞かれます。幼い子どもたちのその声を聞くと、「あれ、今日も一日が終わった。」と心から安らぎました。対して父親を呼ぶ「アアウ!アアウ!」の声は聞けず仕舞いでした。

活動を通して一番の収穫は、相手の目線で物を見る習慣がついたことかもしれません。

人と人、国と国とが互いに尊敬し、信頼し合うことの大切さを実感しました。そのためには、相手の国の歴史や風習や価値観、加えて自国の歴史もしっかり学ぶことが大切だと思いました。

いま一つは、相手に対し「何かを教える、与える」のではなく、「共に考える、共に行く」方が歓迎されます。ボランティアをする方も、相手から教えてもらい何かを得ることが大切だと思いました。

現地で知り合った人達との交流も次第に薄れましたが、唯一家族ぐるみでの交流が続いています。それは、現地で二年間通訳として私の仕事を支えてくれた当時19歳だった女子大生との13年間にわたる交流です。

彼女は私の帰国後、私と縁のあった現地の理工系大学に入学、そして卒業。結婚。第一子誕生、日本の大学院への国費留学、第二子誕生と目まぐるしいばかりの歳月を経て、現在、京都大学の大学院博士課程に再び国費留学し、二人の子どもを育てながら日々研鑽に努めています。彼女と夫と二人の子どもの将来が楽しみです。JICAでのボランティア活動は、私に素敵な土産を持たせてくれました。



ヨルダン

鬼木一馬

(2018年度3次隊 環境教育)

九州と同じくらいの緯度に位置するヨルダンで環境教育を希望したのは、日本と同じく洪水の水害や、地下資源には恵まれず食料自給率も低く、輸入に依存しているという似た状況にある国で、持続可能な共生社会に向けて行動する人材を育成することに、使命感的なものを感じたからです。加えてヨルダンの森は国土の1%以下となっており、水資源も貴重です。

国際物流の仕事辞めて協力隊に参加を決めたきっかけは、ベシヤワール会・中村医師の講演を福岡で聴き、お話を聞いて感動したからです。この時水資源の大切さや気候変動の危機を強く感じました。

協力隊の環境教育研修は OECD・SDGs モデル都市北九州市でした。また個人的に、福岡市の日本最大の海水淡水化プラント・まみずピアを見学、朝倉市で九州北部豪雨災害復興ボランティアに参加、あまぎ水の文化村・山田堰を見学、久留米市でプロジェクト WET 講習会に参加、水俣市を訪問など、多くのことを地域から学びました。

地元八女市と同程度の人口の任地 Jerash (首都 Amman は福岡市の感覚) は、地方ならではの人の距離の近さなど似ているところが多く、とても暮らしやすいと感じています。大きく違うのは家族を大切に一人暮らしをしないことや、宗教くらいです。ヨルダン人もお茶をたくさん飲みますが、緑茶でなく紅茶です。美しい自然保護区、ザルカ川、ヨルダン最大のダム、市の中心に遺跡などがあり、野菜、オリーブ、乳製品などが美味しいですが、その一方、川の汚染、違法伐採、路上のごみなど多くの問題を抱えています (ちなみにヨルダンみやげで人気の石鹸 TRINITAE の日本唯一のショップは福岡にあります)。美しい Jerash を見るために、学校の生徒、先生、その家族、地域住民と共に、授業 (前職の経験を活かし、仮想水貿易など)、アクティビティ、ワークショップなどを通じて、アジアの反対側で環境について考え・行動し・継続していきます。

帰国後は水や環境に関する仕事を見つけ、将来の世代に繋いでいきたいです。



地域を味わう旅列車 ザ レールキッチン チクゴ

THE RAIL KITCHEN
THE RAIL KITCHEN CHIKUGO

西鉄お客さまセンター 0570-00-1010 (または 092-303-3333)

レールキッチン | 検索



ENERGY FOR NAGASAKI

この街のエネルギーになりたい。

チョープロ

カヌースプリント日本代表
水本圭治 (チョープロ所属)

〒851-2127 長崎県西彼杵郡長与町高田郷 62-1
TEL: 095-856-8101 WEB: <http://www.chopro.co.jp>

テレビ東京「ワールドビジネスサテライト」、RKB毎日放送「今日感ニュース」等で
相次ぎ紹介された環境対応型特殊塗料シリーズ

福岡県より特定建設業の許可（福岡県知事許可〔特-29〕第33112号）を受け、
メーカーでありながら施工と施工管理に関する一切の業務を自社で行うことができます。

屋根・外壁の遮熱と断熱で消費電力削減効果
建物の延命と環境対策（CO₂削減）
スレート屋根のアスベスト封じ込めと強度復元

- 経済産業省“新連携計画”認定
- 経済産業省“中小企業創造活動促進法”認定
- 一般財団法人日本建築センター“アスベスト粉じん飛散防止処理”認定

工事（除去工事ケミカルASR工法）認定

- ◇ 国土交通省“封じ込め処理用薬液ケミカル浸透性特殊樹脂”認定
- ◇ その他：ダイオキシン除染工事、抗菌塗料販売・施工

 **ムライケミカルパック株式会社**

代表取締役社長 村井正隆（福岡県日韓親善協会副会長）

本社：〒830-0053 福岡県久留米市藤山町696-5

TEL：0942-21-7667

FAX：0942-22-4570

URL：<https://www.murai.co.jp>

E-mail：info@murai.co.jp

営業所：福岡・東京



【YKKAP九州製造所様（熊本県八代市）の施工例】
施工面積 約20万㎡



私たちの仕事は
建物に命を吹き込む
仕事です。

この街と
一緒に生きる。



Make Next.
九電工



幸せをつくる住まいづくり

ふれあいの街づくり・住まいづくりをスローガンに、住まいづくりの主役であるお客さまと、お客さまからお預かりしている現場を第一に考え、幸せづくりのお手伝いを行います。そして、お住まいになられてからずっと安心して暮らせるよう、家まもりとして長きにわたりお客さまの笑顔を創ってまいります。



■会社を知りたい方は

九州八重洲

■販売中物件を知りたい方は

やえすの家

(092)472-2888

〒812-0007 福岡市博多区東比恵1丁目5番5号 THE RISE 八重洲



GOOD DESIGN AWARD 2017

社会の未来のために、 私たちができることを。

©GROOVISIONS

西日本シティ銀行は、より良い社会の実現を目指し、SDGs(持続可能な開発目標)への取組みを推進しています。地域のみならず社会の未来のために地域金融機関としてできることを考え、グループ一丸となって積極的に取り組んでまいります。



SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS



@ncbankofficial
@ncbank_official

「青年海外協力隊と関わって」

青年海外協力隊員として活動していたのが約20年前。今は、福岡県のOV会長としてこの活動に多くの若者に参加してもらいたいと思っています。

なぜか？ それは、大きく考え方や生き方が変わるから、かな？ 皆はどうかわからないが私はそうでした。教員をしていた私は、7年間の途上国生活で大きく自分の意識改革ができたように思えます。なかなか根っちは変わらないのだろうが、開発途上国で触れ合った現地の友人たちの優しさ、一生懸命さ、自由さ……。そんなものに影響を受け、自分が大きく変わったように思います。

日本国民の税金で派遣されている青年海外協力隊。国際協力という大きな使命を担っているが、若者育成と帰国後の社会還元等も大切なミッションだと感じます。その青年海外協力隊派遣を40年も前からご支援いただいている福岡県青年海外協力隊を支援する会のみなさん。私も派遣前や帰国後に壮行会等を開いていただき、「よし、頑張るぞ!」と思ったのを覚えています。そんな風に、協力隊活動を、自分たちに直接還元されるものが無いにも関わらず、社会のために若者のためにと陰でお支えいただいている個人、企業の皆様には本当に感謝です。

帰国後の私も、少しでも社会還元をと思い、不登校や引きこもりで自信を失いかけている子どもたちの居場所をNPO法人として立ち上げたり、自分が生まれ育った地域の団体に所属したりして、地域社会の活性化のために自分にできることはないかなと、僅かではありますが、無理なく動いております。これも開発途上国でイキイキと過ごしていた彼らから学んだことかもしれません。「無理なく楽しむ!」どんな環境でもニコニコ笑顔で生きられる社会を夢見て……。



2019年1次隊としてコロンビアで活動中の長方舞香です。青少年活動という職種で、SENAという国立職業訓練所内の学生をサポートする部署にて、学生の社会人基礎力を向上するべく、様々な外部イベントへの同行を行いながら、もっと良いSENAになるような提案ができるよう関係づくりを行っている最中です。

福岡市内で通信制高校や高等専修学校の教員を経験し、その経験を通して途上国で教育に携わりたいと思いJICAに応募しました。コロンビアは日本の真反対にある国です。私は第二の都市メデジン近郊が配属地です。

活動を通して感じた事は、この国の人々は本当に温かい人ばかりで、全ての人が外国人である私に、まるで家族であるかのように接してくれます。そして毎日すべての人が楽しそうで、コミュニケーション能力が高いなと思います。さすが幸福満足度が高い国だなという毎日です。

一方でメデジンは昔大きな麻薬組織があり、現在もドラッグが多く存在します。反政府組織のFARCという組織の存在も大きく、2016年にFARCと政府の和平協定が結ばれてから、SENAにもFARCを脱退し勉強をしている学生がいます。10年から40年間山の中で過ごしてきたという30代～70代の学生たちの話を聞き、日本との生活の違い、「当たり前」の価値の違いに驚きました。

授業の中で、元FARCの方達に平和を題材として、原爆の話と折り紙の鶴の話をした後に、一緒に鶴を折りました。40年FARCとして過ごし、70歳になった今SENAで勉強し新しい生活を始めた学生が日本人から平和の話を聞けて、一緒に鶴を作れたことが本当に嬉しいと話してくれました。

様々な人が“私”という人間を介して“日本”という国を感じてくれ、感動してくれます。正直私に何ができるのかまだわかりません。毎日コロンビアの人々に助けられ、愛情をもらいながら過ごしています。

まだ始まったばかりのコロンビア生活。少しでもコロンビアの人々に多くのことを伝えることができるよう、頑張りたいと思います!!!





パラグアイ

小田翼

(2018年度1次隊 体育)

「体育、スポーツの力で国際協力！」

パラグアイという国をご存じでしょうか。国の面積は日本とほぼ変わりませんが、人口は800万人しかいません。ブラジル、ボリビア、アルゼンチンに囲まれている内陸国で、公用語はスペイン語と現地語のグアラニー語が使われています。現在、パラグアイの南に位置する小さな町で、体育隊員として活動しています。

現地に着いて早くも1年と半年が過ぎようとしています。パラグアイでの生活は、日本とは違いゆったりとしています。学校に時計はなく、授業は時間通りに始まりません。配属先は私立の学校で、主に中学、高校生に対して現地の体育教師と一緒に授業を行っています。

パラグアイの一般的な体育の授業は、軽いウォーミングアップをした後、サッカーをして遊ぶという印象です。その現状を改善するために、年間指導計画を立て、いろんなスポーツを学習できる機会を作りました。まだまだうまくいかないことだらけですが、今ではハンドボールやバスケットボール、バレーボール、器械運動などが実施されるようになりました。現地の体育教師とは今では仲良くできているものの、当初はなかなかコミュニケーションがうまく取れず、もやもやする毎日でした。しかし、後になって自分が意見を押し付けていただけであったことに気づき、相手の意見を尊重するようになってから少しずつ信頼が生まれ、今では最高のパートナーとして活動がスムーズに行えています。

彼と現地の人々を巻き込んで開催したマラソンイベントは今までの活動で一番印象に残っています。南米と言えばサッカーです。その状況の中、マラソンをやっても誰も人は来ないよ、というのが最初の課題でした。そこからだんだん協力者が増え、最終的には250人以上もの参加者を集めてマラソンイベントを実施することができました。その日はマラソンで町が盛り上がり、地域の活性化にもつながりました。何より自分自身の成長を感じました。残りの任期楽しみたいと思います！



パラグアイ

畑中遙

(2018年度1次隊 青少年活動)

「任地での体験」

大学の時に、協力隊に行った先輩を訪ねてエクアドルに遊びに行ったのが、協力隊を知るきっかけで、それ以来ずっと気になり社会人7年目に応募しました。

日本での小中学校での教員経験を生かし、ここではNGOに配属され地域の子供達と若者への教育活動を通して生活の質の向上を図っています。具体的には体育と算数、そして英語をニーズのある所で教えています。日本では学校にしか勤めたことがなかったので、NGOで働く経験というのも貴重です。学校に不足しているものを補い、学校のスタッフと協力しながらイベントやプロジェクトを実行します。またボランティアはコミュニティに暮らしているので、課外活動もしやすく、これまで放課後のダイエット教室や休暇中の英語教室などを実施しました。

パラグアイの好きな所に「のんびりしているところ」と「分け合う文化」があります。真面目な日本人の気質では「先を見通さないこと」や「目的をもって始めないこと」などが目につき、イライラすることもあるのですが、長く生活するうちそれにも慣れますし、自分が時間を守らない分、それに関して他人も責めないのが筋が通っています。(笑)

私は自炊していますが、自分で作ったものを食べていた時、「あなたは一度も自分の食べ物を勧めてくれたことがないね」と家主さんに言われ、ビックリした事があります。パラグアイでは誰かの前で飲み食いする時、その人にも勧め、分け合うのが当たり前です。

またパラグアイの人達にとって、家族は言わずもがな1番大切なものです。自立した子ども達も、毎週末ごとに、何があっても両親のもとに集まりアサード(パラグアイ風炭火焼バーベキュー)を一緒にします。隣にいる人に気を配り、分け合うことの大切さ、また「家族が何より大切である」という真理に、ここで改めて気付かされました。





パラグアイ

濱渦華子

(2018年度4次隊 看護師)

「パラグアイで感じたこと」

2018年度4次隊、看護師としてパラグアイに派遣されている濱渦華子です。私の任地は人口4400人ほどの田舎の小さい町です。道路のほとんどが石で埋められたガタガタの道で、牛や馬が自由に散歩しているようなどかな所です。住民はほとんどが顔見知りで、人とすれ違うたびに挨拶を交わしています。私の配属先は家族保健ユニットといって、同僚が20名ほど在籍する、町にひとつしかない診療所です。主な活動は、同僚と一緒に診療所に来る患者さんに対して、高血圧や糖尿病など疾患の基礎知識や予防方法に関する講習会を行ったり、学校に出向いて子どもたちに性教育や手洗い、歯磨きの指導など、若年妊娠や病気の予防知識の普及を行っています。

この任地で感じたことは、住民の人々が幸せに暮らしているということです。スーパーマーケットもレストランもありませんし、休みの日に他の町に出かけるということもほとんどしていませんが、家族との時間を大切にしている、暑い日には冷たいマテ茶を飲み交わしながら家族や友人とお喋りをしてゆっくりとした時間を過ごしています。このマテ茶を飲み交わす時間は任地で過ごす私の好きな時間です。また誕生日には必ず小さなパーティーを開き、知り合いの人にお菓子を振る舞って人とのつながりを大切にしています。

任地の人たちにとって、たくさん食べてゆっくりと時間を過ごすことが幸せなのですが、いつも食べ過ぎてしまい、かつ運動をほとんどせず座って過ごしていることが多いので、少しでも運動をしてもらえるように、最近ではダンス教室を行って住民の人々と一緒に汗を流しています。パラグアイはこれといった有名な観光地がありませんが、住民の人々の幸せな時間がたくさん詰まったのどかで落ち着いたところですよ。



ブラジル

伊取成貴

(2018年度1次隊 野球)

この度は、福岡県青年海外協力隊を支援する会様設立40周年記念、誠にありがとうございます。

私は2018年7月、日系社会ボランティア1次隊として、10月15日までパラ州、トメアスーで野球隊員として活動し、現在はリオデジャネイロ州で引続き活動を行っております。ブラジル生活も約一年と半年が経過し、日々の生活に違和感を感じることなく活動しております。

残念ながら私は10月15日に、野球人口の減少に伴いボランティア活動を十分に行えないことを理由に任地変更となりました。トメアスーはアマゾン地区に大きな日系コロニアを作り上げ、今年で移民90周年という節目でありブラジル日系社会を語る上で欠かすことのできない歴史深き町。そんなトメアスーには青年チームの練習はなく、また、指導していた子どもたちも、家庭の事情や仕事の都合で、平日は全く練習時間が取れない状況が長く続きました。なんとか打開策はないかと様々なアプローチをかけたのですが、直接的な解決にはどれも至らず、「ぼくは彼らに何を伝えることができるだろうか」と自問自答の日々が続きました。任地移動前日、自分の約1年半の思いを伝えようとみんなへの別れの挨拶。その時に先に声を発したのはぼくではなくトメアスーの方々。「力になれずにごめんな。」

その言葉で全てを察し、これまでの想いが込み上げてきました。野球の魅力を伝えきれず、半ば終了してしまったトメアスーでの活動に力不足を感じ、切なさや、やるせなさを感じていた私が、これまでの人生で決して感じたことのない感情、そしてこの場所で生活した価値を再認識した特別な瞬間でした。

現在もなお、トメアスーの方々とはSNSや電話を通じて連絡を取り合っています。「また帰って来いよ！みんな待ってるから！」最近ではリオデジャネイロでの新しい活動も軌道に乗ってきました。当然トメアスーでの大きすぎる経験を活かしながら。





ブラジル

井上藍

(2018年度4次隊 青少年活動)

「ブラジルでの活動」

2019年2月より、ブラジルの南にあるパラナ州ロンドリーナ市で青少年活動をしています。パラナ州はサンパウロ州に次いで2番目に日系人が多いところで、ロンドリーナ市にも多くの人があります。私は主に北パラナ地区にある日本語学校を巡回訪問して、学習者らに日本文化を紹介したり、体験したりしてもらおう活動をしています。

日本語学校では語学学習だけではなく、日本の文化や習慣などの理解を深め、日系社会を活性化させるように努めています。月1回程度訪問し、季節の行事にあわせた文化や工作などを紹介し、一緒に楽しんでいます。また、任地にある現地の学校へも訪問し、普段日本や日系社会とは繋がりのない子ども達にも、日本の良さを伝え日本に興味を持ってもらえるように日本の歌や折り紙などを紹介したり、彼らの文化や習慣を教えてもらったりと、異文化交流活動をしています。

ブラジルは今年で移民111周年を迎えました。かつて日本からこの地へ移民をした1世から世代交代が進み、今では3世、4世の世代が中心となっています。多くの若者は、普段の生活や家で日本語を話す機会も少なくなっています。それでも日本へいつか行ってみたい、日本の文化が好き、日本語を話したいなどそれぞれの夢や目的を持って、日本語学校で学んでいる人々が多くいます。

ブラジル国内、特に日系人が多く住んでいる地域では、未だに日本の伝統的な文化や習慣も残っています。祭りや運動会、盆踊りなどの日本らしい行事も開催され、お年寄りから子どもまで多くの人が集い、一緒に楽しんでいます。

この長い歴史の中で日本文化や日本語がブラジルの文化と融合し、少しずつ変化しながらブラジル日系社会の独自の文化へと変化しています。出会った人々が少しでも日本に興味を持つきっかけになったり、日本やブラジルの良さを再発見してもらえるような活動を今後も行っていきたいと思います。



ペルー

堤理加

(2018年度3次隊 文化財保護)

「嬉しいこと、苦しいこと、おいしいもの」

私はペルーの首都リマにある天野博物館で2019年2月から活動を始めました。この博物館は秋田県出身の天野芳太郎という実業家が創設した小さな私設博物館で、ペルー各地にあるさまざまな文化の織物や陶器を展示しています。

主な仕事は、日本人来館者のガイド。日本が夏休み期間の8・9月は日本人観光客が多かったのですが、他の時期は少なく、そういう時は博物館職員の作業を黙々と手伝っています。

来館される方の多くは、ガイド後に「ペルーの文化の多様性を知ることができてよかった」「楽しかった」などと言ってくれるので、嬉しくなりやりがいを感じています。褒められて伸びるタイプなもので。

その一方で、時には心無い言葉をぶつけてくる人もいます。私がスペイン語をきちんと話せないことを知ると、「スペイン語が話せるようになってから来るべきだ」と言う人。この博物館が、海外ブランドショップなどもある外国人に人気の観光地にあることから、「こんなところに住むのは贅沢だ」と言う人もいます。私は福岡県のほどよい田舎の出身のため、都会に住むことに違和感があり、ストレスに感じていたことも事実です。そこに、そういう発言が少しずつ少しずつ積み重なっていき、正直苦しいときもありました。しかし、今はこれも貴重な体験だと、ポジティブに受けとめられるようになりました。

最近では休みの日に散歩がてら行動範囲を着々と広げ、見つけたカフェでのんびりコーヒーとケーキに舌鼓を打つのが至福のひとつになりました。ペルーのコーヒーはおいしいんですよ。ただ、日本に帰る頃には体形と体重がどうなっているんだろうという不安を抱きながら…。今後は、食べ歩きもしつつ、ガイドの勉強のためにも、ペルー国内の遺跡や博物館めぐりの旅に出ようと思います。もちろん、スペイン語の勉強も、ですね。



初めまして、ボリビアのコチャバンバにあるサカバという町で活動している、2018年度1次隊、環境教育の笹尾員統です。ボリビアに来るまで海外に行ったことがなく、日本を出発する時は、知らない地・知らない言語で生活することに不安と希望を抱いていました。

ボリビアに着いたのは明け方で、始めに目にした景色は、ラパスの素晴らしい夜景でした。地形がすり鉢状になっており、空港から市街へ向かうバスの中で、興奮を抑えきれず叫んだことを今でも忘れられません。活動が始まって最初に気づいたことは、ボリビア人は挨拶を重んじていることです。日本にいた頃、バスや電車に乗る際に、他の乗客に挨拶することはなかったですが、ここでは乗車する際にほとんどの人が「おはよう」「こんにちは」と挨拶をします。挨拶をすることは当たり前のことであるはずなのに、とても新鮮に感じて、率直に良い習慣だなと思いました。もちろん日本でも挨拶はされていますが、それよりも人々がより自然に挨拶をしていて、それ以外の感情表現も自然にやっけていて、時間が経つにつれて自然に自分もそれをやっていました。

また、ボリビアには特別な日が多く、「先生の日」「愛の日」「女性の日」などなど、これらの日にはみんなでお祝いをし、一人一人ハグをしてお祝いの言葉を掛けます。人との距離が近く、陽気で気さくでいつも心が和みます。活動が上手くいかないことや日本が恋しい時は、この風習に何度も助けられています。もちろん、いい加減なことも多く、言ったことをしなかったり、時間通りに来なかったり、予定通りに物事を進めないことはいくらかもあります。でもそれも国民性や文化なので気にしていません。活動では、学校や地域の会議に出席して環境教育をしています。具体的には、日本にごみが落ちていない理由を、日本の精神や規律を通して説明し、環境教育を行っています。任期満了まで少しでも良い影響を与えられるように活動していきます。



この度は、福岡県青年海外協力隊を支援する会の設立40周年を迎えられたこと、心よりお祝い申し上げます。表敬訪問後、会の皆様に壮行会をしていただき、任地へ赴いてから、早くも14ヶ月が経ちました。

「セントビンセント及びグレナディーン諸島」という長い名前の国を、聞いたことがあるでしょうか。私の派遣国は、カリブ海の小アンティル諸島に位置する、本島と離島を合わせると、福岡市よりも少し大きいくらいの面積に、約11万人が暮らす小さな国です。日本人は3名のJOCVしかいません。パイレーツオブカリビアンの中にもなった綺麗な海が広がっているので、週末などを利用し離島に行き、美しい自然に癒されています。初めて見る絵の具のような鮮やかな色の海でウミガメと泳ぎ、とても感動しました。

私は栄養隊員として、首都キングスタウンにある保健省栄養課に所属しています。カリブ海では、糖尿病や高血圧などの非感染性疾患が多く、国民の健康状態が非常に問題視されています。日々の活動は、公立病院で実際に入院・外来患者への栄養指導を行い、コミュニティにおける栄養講座の実施、また保健省での栄養に関する国のガイドライン策定の補助、新聞に載る栄養コラムの担当、ワークショップや健康フェアへの参加や同僚の業務補助等、同僚と意見交換をしながら、多岐にわたる業務に携わらせてもらい忙しい日々を過ごしています。実際に生活しなければわからない現地での生活、人々の考え方、食生活の違いを肌で感じながら、様々な葛藤を抱えながらも、日本での管理栄養士としての経験を生かして日々の活動に取り組んでいます。

福岡の美味しい食べ物が恋しい毎日ですが、健康第一、残り1年弱の任期に取り組んでいきたいと思えます。末筆ながら、福岡県青年海外協力隊を支援する会の一層のご発展と福岡県出身の協力隊員のさらなる活躍を祈念いたしまして、お祝いの言葉とさせていただきます。





パナマ

柴田道世

(1993年度3次隊 栄養士)

「人に学び多様な社会への歩みを進める原動力」

先日、JICA がエジプトで進めている日本式教育に関する研修会に参加し、学級会、日直、給食、掃除など、日本の学校ではあたりまえの「特別活動」について、日本、エジプト両国の実践発表を聞き、意見交換をしました。

参加者の方々と話をしている時、青年海外協力隊員だった25年前のパナマ共和国での出来事が鮮明に蘇りました。

それは、ホームステイ先のホームパーティーでのこと、準備、片づけを黙々とこなす私達協力隊員を見たホストマザーが、ソファでくつろぐパナマの若者達に一言、「あなたたち、よく見なさい。あれこそが日本の教育、日本の力」。

思えば、2年間の活動では、栄養士として未熟だった私の技術より、コツコツと記録したり、食事の時に「いただきます」と言ったり、米粒一つも残さないように食べたりする私の態度や物事に対する姿勢の方がよく伝わりました。

現在は、ペルー国籍の夫、3人の子どもたちに囲まれ、時にはホストファミリーとして他国の子どもたちとも楽しく過ごしています。

振り返ると、息子たちも、ホームステイの子どもたちの出身国の文化や風習を学ぶよりも、小学生でありながら単身ホームステイしたり、意見をはっきり言ったり、母国語ではない英語を難なく話す姿に影響を受けてきました。

そんな環境で育った彼らもまた、周囲に何かを投げかける存在になっているようです。長男の通う高校には、多国籍の個性豊かな生徒が集まっていて、担任の先生が、「最近、頭髮検査に疑問を感じるんですよ」と眩くほどになり、日本の社会の小さな変化に喜びを感じています。

これまでの人生の大半、多様で新鮮で希望に満ちている、そんな環境に身を置く事が出来た幸運を想い、そのきっかけとなった青年海外協力隊派遣、それを支えてくださった協力隊を支援する会のみなさまには感謝の気持ちでいっぱいです。



フィジー

鐘ヶ江美幸

(2016年度2次隊 栄養士)

40周年おめでとうございます。支援する会の皆様に支えられて無事活動を終える事が出来ました。長年協力隊をご支援いただき有難うございます。

さて、私はフィジーの生活習慣病対策、母子保健事業で栄養士としてフィジーに派遣されていました。要請内容は、①栄養指導、②栄養改善についての啓発活動、③イベント開催時のサポート、④調理員への衛生勉強会ということで、こちらの要請内容に従って活動して参りました。

栄養指導としては、フィジーの病院で個別、集団栄養指導を行いながら、正しい食事療法などの知識の普及と合併症予防について、ポスターなどを作成し入院・外来患者の方への栄養指導を行いました。

栄養改善についての啓発活動としては、村、町、学校などで健康診断と、ハイリスクの方への個別栄養指導、正しい食事の量と取り方などについての集団栄養指導を行いました。

イベント開催時のサポートとしては、糖尿病予防月間、減塩週間、生活習慣病予防月間などの際に、ポスター作成、栄養指導、展示品の準備、景品の準備などサポートし、イベントを現地の人と一緒に開催しました。また、調理員の方へ月一回の衛生勉強会を開催しました。

その他に、母子保健事業として低栄養児プロジェクト、「世界の笑顔のために」を利用した体重計の寄付、日本文化交流として、日本食、寿司作りや折り紙、お箸の使い方などを現地の人に教えました。

現地では、フィジーの仲間たちが、外国人の私を家族のように、家族のイベントや村祭りに毎回誘ってくれて、いつも一緒に行動してくれていました。私もフィジー文化、習慣を受け入れ現地の民族衣装を着て、同じ食べ物を一緒に手で食べるようにしていました。そのことで異文化理解をお互いが自然に出来ていたように感じます。

帰国し、現地で学んだ異文化理解を JICA の OB として、体験談、説明会という形で、地元の国際協力ボランティアとして伝えています。





皆さまの快適な暮らしのお手伝い

久留米ガス

〒830-0003

本社 久留米市東櫛原町1089

TEL 0942-36-2601

FAX 0942-36-2621

<http://kurumegas.co.jp>



学校法人 原学園

原看護専門学校

HARA SCHOOL OF NURSING

「辛子明太子のルーツって？」

気になったら

かねふく

検索



「めんたいこ物語」をご覧ください



九州スタッフ株式会社

WWW.staff-q.co.jp

はたらくをデザインする



キュースタ

福岡市博多区博多駅前3-2-1 日本生命博多駅前ビル

TEL 092-474-0004 FAX 092-483-4100

キャリアコン資格者在籍
正社員・派遣事務 就業支援
キャリア転職支援



平成ノ大造営

時満ちて 道ひらく



宗像大社



「歌を歌おう」

カイロのサイーダゼイナブという庶民的な地区の小学校を日替わりで巡回し、体育の授業の補助をしています。また、エジプトは教育改革の最中で特別活動や清掃活動などを取り入れた日本式教育を先進的に進める学校（以下EJS）が2018年に開校しました。現在はサイーダゼイナブの一般の小学校とEJSで活動をしています。これら協力隊の要請にあった活動以外にも個人的にシリアやスーダン難民の施設にも通い、ボランティアをしています。

エジプトでは毎年3月に東日本大震災の追悼イベントが行われています。2019年はオペラハウスで合唱を実施するに当たり、隊員の活動先も参加させてもらうことができました。そこでシリアやスーダン難民の施設の子どもたちに写真や映像を見せて東日本大震災の話をして、現在は復興してきているのでエールを送ろうということで、カーペンターズの「Sing」の日本語バージョンを歌うことにしました。子どもたちは日本語の知識が全くない中で、我々の行った練習だけでなく家でも各自練習して、日本語の歌詞を覚えてくれました。また日本大使館を練習で利用させてもらうことで、子どもたちの練習の士気も高まり、良い準備をして本番に臨むことができました。

いつになく緊張していた子どもたちですが、歌い終わった後は満面の笑みでステージから出てきました。多くの観客の前で自分たちの練習の成果を披露する場に恵まれないエジプトにおいて、今回の追悼コンサート参加でかけがえのない経験を得ることができました。また、被災地の住民が他地域へ移り住んだという状況を知ったシリアの保護者は、理由は違えど故郷を離れざるをえなくなった想いを自分たちのことと重ね共感し心配していました。国籍や宗教が違って通じる想いはあるのだなと感じました。これからも様々な交流を通して相互理解を深めていきたいです。



合唱終わりのシリア・スーダンの子どもたちの写真。左から2番目が私。中央はピアノ伴奏してくれた隊員。



私は平成29年度3次隊のシニア・ボランティアとして、平成30年1月にエジプトのカイロに赴任した。職種は、教育行政・学校運営です。カイロ県教育局内のランゲージ・スクール10校を巡回しながら校長のパートナーとして、主に以下の2つの業務内容で活動している。「①学級会、学級指導、清掃活動、学校行事など特別活動の提案・実施とその定着」「②現地教員の授業参観を通じて、指導能力向上のためのアドバイス実施」。

2018年9月にエジプト国内にEJS (Egypt-Japan School) 35校が開校した。私は、カイロ県内のEJS3校を巡回指導しています。また、2019年1月から4月までエジプト国内のEJS28校に、JICAボランティアとキャラバンを組んで巡回指導を行いました。

私は、カイロ教育局に通勤するために地下鉄やバスをよく利用しています。エジプトの男性は、お年寄りや女性、障害を持っている人に対して優しく接します。その1つが、車内で席を譲る習慣である。目の不自由な人が地下鉄に乗車しようとする、近くの人がそっと近づき手を引いて導き、座席に座らせていました。しかも、どの人も当たり前のように自然に言葉をかけ合って行動している場面を多く見かけます。私もバスや地下鉄の中で立っていると、若者や成人男性が立ち上がって、座席に座れと声をかけられて、席を譲ってもらうことが多いです。

あるとき、地下鉄のなかで立っていると、私の横に立っている成人男性が、離れたところに座っている若者に席を譲れと言いました。すると、言われた若者は素直に立って私に席を譲ってくれました。申し訳ない気持ちで座らせてもらいました。また、バスの中で男性が席を空けて、座れと言ってくれました。側に立っていた若い外国の女性が自分に言われたと勘違いして座りました。すると、その男性は、その女性を立てて、私を指名して座れと言ってくれました。有りがたく座らせてもらいました。日本では道徳的実践力の育成が叫ばれていますが、日本の車内ではあり得ない光景です。





エチオピア

竹内詩絵

(2018年度3次隊 幼児教育)

私はエチオピアの首都、アディスアベバで幼児教育隊員として活動しています。配属先の幼稚園に赴任して9ヶ月が過ぎたところです。エチオピアの幼稚園では英語やエチオピアの公用語であるアムハラ語、数字の読み書きを教えることが中心となっていますが、その中で遊びを通した学びを伝えていくことが主な活動です。

言葉や文化も違い、保育の考え方も違う国では、もちろん上手くいくことばかりではありません。しかし、その子どもたちや先生たちの言葉にやりがいを感じることも沢山あります。アートを教える時間でのこと、現地の先生から授業の提案を求められたとき、段ボールでスタンプを作りました。授業の最後に「楽しかった?」と子どもたちに尋ねたつもりでしたが、一番に先生が「楽しかった!」と答えてくれたのです。また、こんなこともありました。あるお母さんから「この子が、運動遊びが楽しかったと家で話していました。先生のこと大好きだって。」と言ってもらったこともあります。日本で働いていても感じるのですが、私のアクションで誰かが喜んでくれるというのはとても嬉しいことです。他にも、紙製作の作り方を聞きに来て私のことを頼ってくれたり、私の「遊び」を楽しみにしてくれる先生、教材づくりを進んで手伝ってくれる先生や子どもたちもいて、些細な変化が今は嬉しいです。これからは先生たちが進んで遊びを授業に取り入れてくれたらいいなと、少しの期待と楽しみを抱えています。

これからの課題としては、いろんな種類の遊びを知ってもらうこと、創造力を養う遊びを提案していくこと、遊びの広がりを理解してもらうことだと思っています。そして、私の活動を通して先生たち、子どもたちの笑顔がもっと増え、幼児教育の概念を少しでも変えていけたら。何十年後のエチオピアのために、子どもたちのために、これからも活動していこうと思います。



ケニア

田中健一

(1976年度1次隊 自動車整備)

「今も心に残る福岡出身の三名のOV達」

私には今も記憶に残る福岡出身のOVが三名います。三名とも病気が原因で、夢途中で去る事となってしまいました。

まず一人目は、'84年2次隊でタンザニアに電話線路の職種で派遣された、KさんことKY氏です。隊員時代は首都のダルエスサラームに個人の空手道場を開き、タンザニア中に日本の武術を広めました。帰国してからは、地元の仕事NTT福岡に戻り、私達の協力隊福岡OB会の役員として活動し、彼の発案に依る第1回ワールドグルメフェスティバルを、福岡市の中心中洲にNTTが所有していたNパサールで開催する事が出来ました。また川端商店街の事務所二階の会議室で、土曜日の夜「あなたも今日から国際人」というタイトルで、帰国OBの派遣国での話を一般市民の方々に聞いていただくセミナーを開催したのも彼でした。両方とも、現在も彼の意志を引き継いで続けられています。私も時々参加させていただいていますが、今更ながら彼の偉大さを感じています。

二番目のOVは、FN氏です。彼の隊次は'76年2次隊で、中米エルサルバドルに土壤肥料という職種で派遣されました。帰国してからは、一念発起して広告関係の会社を立ち上げ、その忙しい仕事の合間を縫って私達のOB会の役員として活動し、様々な行事がある時は、彼が率先して準備等を行い、OB会の縁の下の力持ち的な人柄でした。一緒に頑張ってOB会を盛り上げてきた仲間として彼の立ち去りはとても悲しい事でした。

三人目は、前の二人に比べると新しい隊員で、'88年2次隊で中米ドミニカに看護師として派遣されたAKさんです。

彼女は、KY氏やFN氏とは違いOBの役員としては活動していませんでしたが、行事がある時は、必ず手伝ってくれる暖かい人柄で、助けていただいた記憶が沢山あります。彼女は、帰国してから乳がん検診でガンが見つかり手術を行って回復へと向かう事が出来ました。その後鹿児島で良縁があり結婚式を挙げる事が叶いました。しかし数年後帰らぬ人となりました。

三人共間違いなく言える事は、熱い思いは同じで、福岡県協力隊OB会を盛り上げる事に関しては誰にも負けない位でした。

改めてご冥福をお祈りいたします。彼らも千の風となり見守ってくれていると思いますので、私達も頑張りたいと思います。





ケニア

小林礼奈

(2018年度1次隊 栄養士)

「アキーニ！ナンゴ??」

「アキーニ！ナンゴ??」

任地のビタにいますと、地元の人々はこのように私に話しかけてくる。アキーニとは、ルオ族の呼称のひとつで「朝に生まれた女性」という意味だ。2018年の8月に赴任し、気づけば1年があつという間にすぎた今、これまでの活動をふりかえって私が感じることは、「その地に根ざして暮らす」ことではじめて理解でき、寄り添えることがあるということだ。

赴任当初、「貧困」という言葉が想起させるイメージとはほど遠い、町行く人々のフレンドリーな明るさと、好奇心あふれるまぶしい子どもたちの笑顔に圧倒されたことを、今でも覚えている。しかしビタで暮らしていくなかで、アフリカらしい大らかさがあれば、その裏にみえる不条理さや、頑張っても報われることが少ない社会の仕組み、それゆえに頑張らない人々、そして宗教の果たす役割があることなどが少しずつわかってきた。ギリギリのところまで生きている家庭は、ちょっとした不幸で貧困のループからぬけだせなくなってしまう。

そんな状況の中で、自分が現地の人のためにやっていることは雀の涙程度だ。たったひとりのボランティアが、2年間でできることも限られている。しかし、協力隊だからこそできる小さな活動も多い。そして、任地で暮らしてきたからこそ感じたことを、ここで終わらせずに次につなげていくことが、自分にできることであり、協力隊を派遣する意味ではないかと思う。



ケニア

竹崎万里子

(2019年度1次隊 栄養士)

任地に赴任し、早くも3ヶ月が経とうとしています。私は、ビクトリア湖付近の農村地域にあるンディワという村の保健事務所に派遣されています。現在は、保健事務所に併設されている病院に毎日出勤し、病院や患者の現状把握をしています。時々、管轄下の保健センターなどに同行させていただくこともあります。

初めは、病院の栄養士として働いた経験もなく、分からないことだらけでした。毎日が緊張と驚きの連続で、夕方には疲れ果てて家に帰っていました。帰宅後は、家でホッとしたいところですが、停電が起きないうちに、水の準備、食事の準備・片付け、手洗いで洗濯などもしなければなりません。語学の勉強、活動のことをゆっくり考えたいところですが、赴任してからは、生活することで精一杯でした。ケニアに来て、日本で何の心配もなく、水や電気を使い放題使っていた有難さを深く感じています。

3ヶ月が経とうとしている今、少し余裕を持つことができるようになりました。活動でも病院内での課題が次第に見えてきて、私が今まで日本で積み上げてきた経験をどう生かして、彼らに貢献をしようか考えているところです。

病院では、患者が診察を待っている間に、定期的に病院のスタッフが患者に病気のことや栄養、衛生について話をする「ヘルストーク」の時間があります。最近、勇気を出して一歩を踏み出し、私も患者向けに栄養について話をする時間をもらうことができました。

患者の中には英語を理解できない人もいますので、私が話をするときには、必ず部族語に翻訳してくれる人がいます。話が終わった後は、“Congratulations!” などみんなが声をかけてくれ、次の活動へのエネルギーをもらっています。まだまだ、語学力不足で十分なコミュニケーションをとるまでには至っていない私ですが、周りの同僚のやさしさに助けられ、毎日乗り越えています。その気持ちに応えるために語学力を上げたいと願望している今日この頃です。



将来、あなたのような先生になりたい。補講で、ある生徒から言われた一言です。日本で教員として働いたことがなかった自分にとって、これほど嬉しい言葉はないと感じました。私は新規要請で中等学校に配属されました。全校生徒 800 人は好奇の目でこちらを見ていました。授業中発音の違う私のスワヒリ語を彼らはクスクスと笑います。日本人は体罰をしないからといってあからさまに態度を変えます。チョークはボキボキ折れます。黒板が穴だらけのクラスもあります。日本とは圧倒的に違う環境が大学卒業後の私を待ち受けていました。現地教員も、物が無いからできないと、やる前からやること自体を諦めていました。

日本から来た私ができること、それはやってみせること。クラスの統率は体罰で行うのではなく、ルールで管理しました。ルールは試行錯誤の上 3 つに絞りました。貸し借りのために物を投げないこと。立つときは必ず許可を取ること。自分の授業中は姿勢を正すこと。このルールが彼らに「どんぴしゃ」ではまりました。少しずつ話を聞くようになっていき、授業中ボケをかましたり、流行の歌を歌ったりできるようになりました。現地教員とセミナーも開きました。

やりたいと思っていたけど、どうしていいかわからないと言っていた彼、一緒にアイデアを書き出し、期日を決め、予算を集め、開催をする。普段の生活では味わえない仕事の楽しさを知ってもらうことができました。そのセミナーの打ち上げで、彼はまた別のセミナーの企画を始めたらしく、「翔太とやってみたくてやればできるだろ?」と言っていました。ビールを飲みながら泣きました。で、思いました。私がリーダーになったら、もっと多くの人をチャレンジに導けるのではないか。だから僕は将来必ず社長になります。そして、多くの人のチャレンジをヒト、モノ、カネの面で支援できるような会社を作ります。私はこの強い志をタンザニアで育てることができました。



「マラウイでの生活」

任国に来て早いもので 22 ヶ月。任期も残り 2 ヶ月となってしまいました。私は、マラウイの聾学校で、コンピュータ、裁縫、体育などの先生をしています。生徒は、6 歳から 18 歳くらいまでの聴覚障がい児、約 200 名の学校です。もともと日本での聴覚障がいに関係した仕事をしたことがなく、日本の手話も全くわからない自分が、マラウイで聾学校の先生ができるのか心配でした。先生を始めて結構な時間が経ちましたが、何とか先生をしています。

現在自分は、聴覚障がい者の職場づくりを行っています。マラウイの障がい者の働く場所がなく、学校卒業後は家で農家の手伝いをしている人がほとんど、という現状を聞き、学校内に卒業生の働く場所を作ろうと思ったのがきっかけでした。自分たちで稼いだお金で、働く土台とお店を、小規模ですが作っています。少しずつ大きくしていくことが望みです。

マラウイでの生活で、人と支えあう事、人とのつながりって大切だと本当に感じています。自分の力不足で、できない事が多々ありました。たとえば、英語が苦手ですが、それを理解しようとしてくれる人、そしてそれを自分の代わりに他の人に説明してくれる人、また地域の人と一緒に何かをしたいと思った時も、誰かが力になってくれる。この地域で、いろんな人とつながり、そして自分の事を助けてくれる人がたくさんでき、おかげで有意義な活動ができています。マラウイでの人との距離感で悩んだこともありましたが、この距離感だから、助け合いが自然にでき、今では心地よささえ感じています。

マラウイでは、青年協力隊が長年にわたって派遣されています。マラウイで昔、協力隊員に教えてもらっていた、一緒に仕事していたという現地の人と話す機会がたくさんあります。しかも 30 年以上も前の隊員の名前を憶えていて、そして何よりうれしそうに話してくれます。そういう良い関係性を築いてきた先輩方のようになれるよう、残り少ないですが楽しみつつ活動していきたいと思えます。





マラウイ

柿原莉沙

(2019年度1次隊 障害児・者支援)

「心温かい人々との出会い」

協力隊を知った時、応募を決意した時、合格通知を受け取った時、訓練所に入所した時、70日間の訓練を修了して候補生から隊員になった時……。私にとってのマラウイへの道は、一体どこからスタートしたのだろうか。任国へ赴任してから100日が経過した今、ここに来るまでのことを振り返ってみると、10年以上もの月日が流れていた。

長年憧れていた協力隊員になることができた私は、公用旅券を握りしめ、重量制限ギリギリに詰め込んだ荷物を持ち、期待と不安を胸に、7/29(月)06:00に実家を出発。夕方に日本を発ち、香港とヨハネスブルグを経由し、7/30(火)正午頃、カムズ国際空港に到着した。飛行機の窓からアフリカの大地が見えた時には鳥肌が立ち、約30時間にも及ぶ長旅の疲れは一気に吹き飛び、いよいよ隊員生活が始まるのだと身が引き締まった。

「The Warm Heart of Africa」とも呼ばれるこの国は、心の温かい方々ばかりで、困っているとすぐに誰かが声を掛けてくれる。特に、配属先では「あなたが来るのを首を長くして待っていたのよ。私たち職員の一員としてよろしく！」と温かく迎えてくれ、隣に住む大家さんも「あなたは私たち家族の一員よ。いつでも頼ってね、遠慮しないで。」と言ってくださった。

このような人の温かさに囲まれた任国での生活も3か月が経ち、活動計画を立てながら、私には何ができるのだろうか毎日悩んでいる。時の流れはゆっくりだが、あっという間に2年間が過ぎてしまうのではないかと思うほど、1日1日が一瞬で過ぎていく。しかし、この数ヶ月でも自分が変わったと思うことが一つだけある。それは、1日に何十回も“Zikomo kwambiri. (ありがとう)”と言っていることだ。どんなに小さなことでも感謝するようになり、その気持ちを言葉で表現するようになった。ここに来ることができたこと、たくさんの方々に支えられていること、心身の健康に感謝して、マラウイでの2年間を一生の財産になるくらい実りあるものにしていきたい。



ルワンダ

鹿毛謙作

(2018年度2次隊 コミュニティ開発)

「現地の活動について」

Muraho (ムラホ、こんにちは) 2018年度2次隊コミュニティ開発として、ルワンダに派遣されております鹿毛謙作です。現在、農家さんに対してコーヒー支援活動を行っています。私が住む西部県のカロンギ郡は、コーヒーの生産地として有名であり、またルワンダ最大の湖、キブ湖が一望できる地域です。

私の活動は主にコーヒーウォッシングステーション*にて、農協で働く同僚たちと一緒に、コーヒーの品質向上を目指した活動や、ルワンダ人がコーヒーを飲むような啓蒙活動を行っています。

ルワンダは、近年コーヒー生産地として世界の注目を集めており、海外からバイヤーが買付に來ていますが、国内での飲用率は、人口(1200万人)に対して1割程度と少ないのが現状です。そこで私は、もっと現地の方がコーヒーを飲むような活動を行っています。

同僚へのコーヒーの抽出指導や、農協の焙煎豆を広める営業活動等、様々な事に挑戦しています。配属される前まで、同僚たちはコーヒーにたっぷりと砂糖を入れて飲んでいましたが、今ではブラックで飲むようになり、また率先して自分たちでコーヒーを抽出したり、他の同僚に淹れ方の指導する姿を見ると、とても嬉しく思います。

ルワンダに来て早いもので1年が過ぎました。私が自由にルワンダで活動出来るのは、JICA、家族のサポートのおかげです。本当にありがとうございます。残りの任期、悔いの残らないように活動していきます。

* コーヒーの実を洗って乾かす一次加工場





はこぎきぐう 検索

日本三大
八幡

宮崎宮

〒812-8655
福岡市東区箱崎1-22-1
☎092(641)7431

神苑花庭園
☎092(651)1611

宮崎宮ウェディング・宮崎宮清明殿
☎092(632)5588

宮崎宮迎賓館(フレンチレストラン)
☎092(651)1100



発売当時の味の明太子

明太子を
つくってよかった。
昭和23年(1948年)10月5日、博多・中洲の
一角に小さな食料品店が生まれました。店主の
名は、川原俊夫。妻・千鶴子とともに始めた
このちっぽけな店がその後半世紀以上つづく
ふくやの歴史の第一歩だったので。
翌昭和24年1月10日、川原俊夫は、いまま
でも食べたことのなかった新しい味を店に並
べました。これが、いまも博多を代表する味として
親しまれている明太子です。

インターネット

検索サイトに“ふくや”と入力

ふくや

検索



お電話

ハロー ふくや一番

☎0120-86-2981

携帯電話からご利用いただけます。

受付時間/ 9:00~18:00

直営店

右記QRコードより
直営店リストを
ご覧いただけます。



味の明太子

博多中洲

ふくや

中洲本店 〒810-8629 福岡市博多区中洲2丁目6-10

「今日、ケンタッキーにしない？」



株式会社ポールスター

〒810-0042 福岡市中央区赤坂二丁目5番50号
TEL (092) 711-9745 FAX (092) 711-9077

【ケンタッキー・フライド・チキン店舗】

- 〈福岡県〉 天神サザン通り店・福岡赤坂店・原バイパス店・木の葉モール橋本店・片江店・大橋店・
那珂川店・春日店・太宰府店・イオンモール筑紫野店・パピヨンガーデン店・
ゆめタウン博多店・イオンモール香椎浜店・和白店・イオンモール福岡店・若松二島店・
中間店・イオンモール直方店・飯塚柏の森店・飯塚秋松店・久留米中央公園店・
ゆめタウン久留米店・ゆめタウン大牟田店
〈佐賀県〉 佐賀鍋島店・佐賀南部バイパス店・ゆめタウン佐賀店・ゆめタウン武雄店・鳥栖店・唐津店
〈長崎県〉 長崎ゆめサイト店・長崎文教町店・長崎時津店・諫早長野町店・大村松並店・させば五番街店
〈熊本県〉 熊本四方寄店・熊本植木店・大牟田有明プラザ店

Shinoken Group 1990-2020
30th
 anniversary



シノケングループは
 2020年6月をもって
 創立30年を迎えました

不動産経営のパイオニア シノケングループ

シノケングループは、グループの力を結集し、長年積み重ねてきた「安心」と「信頼」のネットワークにより全国のお客様をサポートいたします。



株式会社 **シノケングループ** グループ会社 全 **30** 社

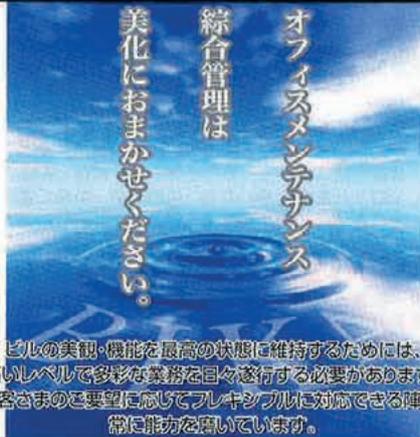
- 不動産セールス事業
- 不動産サービス事業
- ゼネコン事業
- エネルギー事業
- ライフケア事業
- 海外事業



■国内拠点／福岡、東京、名古屋、大阪、仙台、札幌 海外拠点／香港、上海、シンガポール、インドネシア
 ■設立年月日／1990年6月5日 ■資本金／10億9,483万円※ ■グループ従業員数／1,163人※ ※2020年6月末現在

美化

まごころサービス”をモットーに



ビルの美観・機能を最高の状態に維持するためには、
 高いレベルで多様な業務を日々遂行する必要があります。
 弊社はお客様の要望に応じてフレキシブルに対応できる陣容を整え、
 常に能力を磨いています。



株式会社
美化

F812-0011
 福岡市博多区博多駅前3丁目2番8号
 住友生命博多ビル3F
 TEL092-431-6108
 FAX092-474-7850
<https://bika-bm.co.jp>

心が志をも
 志が人成をも

**博多メディカル
 専門学校**

臨床工学士科
 歯科技工士科
 歯科衛生士科

文部科学大臣認定
 職業実践専門課程

博多高等学校

普通科
 【興志館コース】
 特進シブス / 特進ドリーム / 進学
 【キャリアデザインコース】
 ITビジネス / 調理・保育 / 公務員
 ・看護科・看護専攻科

**博多学園
 幼稚園グループ**

博多幼稚園
 博多東幼稚園
 博多南幼稚園
 博多第一幼稚園
 博多のびっこ幼稚園
 博多中央幼稚園
 博多第二幼稚園

学校法人 **博多学園**



福岡トヨタ

ALL NEW HARRIER 誕生



Photo:ハリアー Z “レザーパッケージ” (ガソリン)。ボディカラーのプレジヤスブラックパール(219)はメーカーオプション(55,000円)。車両本体価格4,230,000円
■福岡トヨタ自動車株式会社 / 〒810-0004 福岡市中央区渡辺通4丁目8-28 毎週月曜定休(月曜日が祝日の場合は翌火曜日が定休日となります。)
■お客様相談センター / フリーダイヤル0120-419-555 (●受付時間 / 平日9:00~18:00 / 祝日9:30~18:00 ●定休日 / 日曜・社休日(社休日につきましては、弊社ホームページにてご確認ください。))
*車両本体価格は2020年7月現在のもので、表示価格は全て消費税込み価格です。*車両購入時には別途リサイクル料金が必要となります。*価格には用品、保険料、税金(消費税除く)、登録時に伴う諸費用は含まれておりません。

~新しい人生の始まりに、
オール電化リフォーム~

ついに我が家をリフォームした。
新たに始まるふたりの生活に、
オール電化を選んだ。
今まで、家事は君任せ。
オール電化にしてから、僕のレポートリーと
君の笑顔が増えたかな。



ずっと先まで、明るくしたい。

キレイライフプラス 検索



大きな銀行より、
大好きな銀行になりたい。



この街でこいっしょに
福岡中央銀行



©Paprika, Ink.

<https://www.fukuokachuo-bank.co.jp>

福岡中央銀行

検索

2017年度4次隊でガボン共和国に臨床検査技師として派遣されている一木奈絵です。ガボンの首都から車で約5時間、赤道を越えて少し先にあるランバレネという街の、国際財団アルベルトシュバイツァー病院の臨床検査室で主に活動しています。

ノーベル平和賞を受賞したシュバイツァー博士が生涯を捧げた地、まさに活躍していた病院です。首都リーブルビルの景色は、私たちが想像するアフリカを感じさせないくらい近代的な建物や施設もたくさんありますが、ランバレネは自然に囲まれており、街を流れる雄大なオゴエ川の側で、素朴な生活をするガボン人の生活を垣間見ることができます。

配属先の検査室で働くのは40代後半と50代のスタッフのみ。しかもシュバイツァー病院では長年ヨーロッパから研修生を受け入れてきている為、彼らは初代隊員として派遣された私も、当然のように研修生とっていて「ここで沢山学んで日本に帰りなさい」と何度も言われました。確かに日本では滅多にみることでできない症例も多々あります。マラリア原虫に感染した赤血球や、採血された血液の中でまだ元気に動いているミクロフィラリア、住血吸虫の卵等を顕微鏡で見たときは感動しました。今でも日本で経験できない症例は特に勉強になります。

私は日本で輸血検査に携わっていた為、活動開始当初は、献血・輸血を改善するぞ！と意気込んでいました。しかし現場を見ると、スタッフの知識量の問題以上に、試薬・器械がない、故障、期限切れ、そしてやる気がないなど日本では考えられない、有り得ないことの連続でした。

悔しい思いも沢山しましたが、今では協力的な同僚たちと共に検査業務の効率化や精度向上を行っており、本当に少しずつではあるものの改善が見られてきています。

仕事の中にみんなで話したり歌ったり踊ったり…ガボン人の仕事や人生を気ままに楽しむ姿を見て、彼らの良い部分を活かし、私自身も見習いながら、残りのガボンでの貴重な生活を満喫したいと思っています。



私のガボン人の好きなのところのひとつに、誰にでも Bonjour と言う、というところがあります。ランバレネという小さい町に住んでいますが、目が合うと知らない人でも挨拶するのが普通です。一年半経った今「Bonjour !」はもちろん「こんにちは」とあいさつしてくれる人が増えてきました。誰からも挨拶をされることに最初は驚いていましたが、すぐに普通の事となりました。先日任国外旅行に行った際、このガボン人の良いところを再確認しました。旅行は仏語圏へ行きましたが、話しかけられる言語は大抵英語もしくは片言の日本語で、大抵商売目当て。すれ違っただけで挨拶するなどほとんど無く、日本人同士ですらまともに挨拶しない。ガボンで暮らしていなかったら、知らない人からすれ違っただけで挨拶されると驚くかもしれませんが、これに慣れてしまった今少し寂しさを感じました。観光客扱いにも正直疲れ、あんなに楽しみにしていた任国外旅行中にガボンの良いところを再確認し、そろそろガボンに帰りたいと思った自分にも驚きました。そんなガボン人との再会は意外にも早く訪れました。空港のチェックインカウンターの列に並ぶと、前のガボン人のおじさんが Bonjour ! と。一人嬉しくなってちょっとニヤニヤしながら Bonjour と返事しました。飛行機の中でも、座席近くのガボン人と Bonjour を言い合う。隣のおばさんが、どこからどう見てもアジア人の私にモニターの使い方を聞いてくる。リーブルビルに着くと空港の職員がいつランバレネに帰るか聞いてくる（なぜ知っているのか・・・!）。ガボンに居たら当たり前ですが「あー帰ってきたー！」と思わせてくれる出来事でなんだか嬉しくなりました。任期を終えて日本に帰っても、こういうことが懐かしくたまに恋しく思うのだろうと思います。こういった素敵な気持ちにさせてくれるガボン人と一緒に、残り少なくなった任期を駆け抜けたいと思います。



私は今ベナンのバシラ市というところに住んでいて、農業省管轄のバシラ村落開発支所に配属されています。ちなみにバシラ市はバスケットの八村塁選手の父親が育った町で、八村選手の従兄弟も住んでいます。私の要請内容は農民の収入向上や新規作物の導入等です。

新規野菜の導入では、隣国ブルキナファソで盛んなイチゴを栽培しています。イチゴを知らないベナンの方が多く、初めてみる野菜に興味をもってくれる農家も多いです。

またベナンでも携帯電話はほとんどの人が持っています。そんな中で、人々は足踏みのミシンや炭式のアイロンを使っています。炭式のアイロンは社会科の授業で写真を見た気がしますが、実物を見たのは初めてでした。電気式のアイロンもありますが、値段が高かったり、停電したときにも使えるといった理由で炭式のアイロンなのだと思います。日本で炭式のアイロンが使われていたのはいつ頃でしょうか？携帯電話と炭式アイロンが同居するベナンでは、発展途上である事を肌で感じます。

日本を知っているかベナン人に聞くと大体が知っています。僕がベナンに派遣が決まった際、友人等に伝えてもほとんどの人がベナンを知らなかった事と比べると、それより遥かに多いです。それは日本製の家電や車のおかげでもあると思います。日本車の方が他国の車より値段は高いけれど、故障が少ないから自分は日本車に乗っているんだと言われるときには、自分が日本人であることが誇らしかったです。また肌の色に関してもこちらではアジア人も白人という認識なのですが、僕の肌を見て白人は綺麗で良いよねという風にいる人も結構います。黒人だからという劣等感を持っている人は少なからずいるようで、母親が赤ちゃんに肌を白くするためだといってパウダーを塗っているのを見たこともあります。しかし中には黒人はキラキラしていて綺麗だよねと肯定的な人もいますので、勿論すべての人が劣等感を持っているわけではありません。



40周年、おめでとうございます。西アフリカのベナンに来て1年が経ちました。毎日子供たちと算数で悪戦苦闘しています。

突然ですが「異世界転生」という言葉をご存じでしょうか。アニメ等によく出てくる言葉です。主人公が異世界で生まれ変わり、そこにはない技術や理論を駆使し、活躍するという話もあります。

協力隊生活を異世界転生になぞらえると少しだけワクワクします。未発達な未知の国で、まだ発掘されていない技術や理論を持っているので、それを発揮できると期待するからでしょう。しかしアニメのように、できませんでした。

言葉の壁が焦点でした。言葉は背景をグラデーション状に要求するからです。標語的に言うと、「おはよう」はすぐ通じるが「数学的活動」は通じにくい、ということです。説明しましょう。言葉を使う者であればたいい言葉で挨拶を交わします。だから「おはよう」と言えば相手もすぐ理解します。これは言語使用という最広義の背景を共有しているから実現します。では「数学的活動」はどうかというと、これは学習指導要領に出てくる言葉なので日本の教員には馴染みのものですが、これを単にフランス語に変えただけではベナン人にはほぼ何も伝わりません。それは日本の教育制度の中で使われている言葉だから伝わらないというより狭義の背景を共有していないからです。

私はベナンで「数学的活動」を取り入れた活動をしています、苦戦してもいます。例えば、日本では簡単に用意できる算数タイルがベナンでは用意できないという以前に、そもそもなぜここでタイルを使うべきなのか伝わらない、といった課題があります。おそらくアニメでは後者の課題はあまり焦点化されず、タイルが用意できた時点で課題が解決するといった話になりそうです。わかりやすいからです。しかし、現実の「異世界」で「タイル」を普及しようとするなら、「タイル」の背景、即ち、なぜそれを使うのかということまで共有しなければならず、それには相応の時間がかかります。もう1年、この「異世界」であがいてみます。



大牟田ガスエネルギー株式会社

でんきもガスも!



沖縄ガス



代表取締役社長 我那覇 力蔵

沖縄ガス ショールーム

ゆ〜くる

沖縄県那覇市西 3-13-2

☎(098)863-7730 [代表]

沖縄ガスのでんき



MIZOE ART GALLERY

TOKYO / FUKUOKA

CREATIVE OFFICE
PLANNING DESIGN DETAIL
CORPORATION

代表取締役社長
真田 彬

〒815-0081 福岡市博多区那の川1-1-10
TEL/092-531-4356 FAX/092-531-4350
E-mail/pandp@fk9.so-net.ne.jp

①2019.9.15.制作



Flapping
to the World

福岡県青年海外協力隊を支援する会

①2019.8.20.制作



PEACE ASIA CHANNEL TUNNEL

日韓トンネル実現九州連絡協議会

知的・デザイン文化が生みだす経営

開局50周年

聴かばい云る。

FM FUKUOKA



株式会社エフエム福岡
〒810-8575 福岡市中央区清川 1-9-19
<http://fmfukuoka.jp>



CREATIVE LEASING
地域へ。明日へ。

九州リースサービス

代表取締役社長 礒山 誠二

東京証券取引所一部上場

— 事業内容 —

リース・割賦事業、ファイナンス事業、不動産事業、フィービジネス事業、他

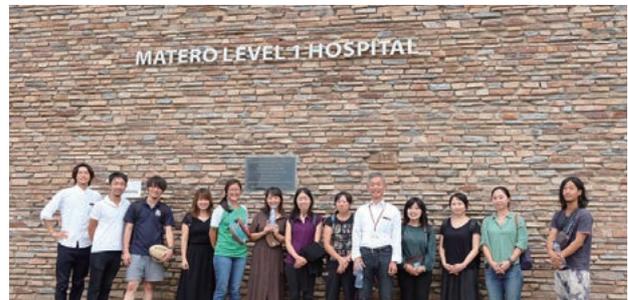
〒812-0011 福岡市博多区博多駅前4丁目3番18号 サンライフセンタービル
TEL 092-431-2530 FAX 092-452-0044

福岡県青年海外協力隊を支援する会の設立 40 周年、誠におめでとうございます。2017 年 4 次隊でザンビアに赴任しています、私、シニアボランティアの原 隆と申します。首都のルサカ市内にあるマテロレベル 1 病院で運営管理の支援をしております。ルサカ市は福岡市とほぼ同じ人口、170 万人を擁する大都市です。その市内にマテロを含め 5 つの日の丸病院（無償資金協力で建設）が来年の 2 月に勢揃いします。日の丸を背負った病院で働く喜びを日々感じながら活動しています。

今日は最近の出来事でもとても誇らしく思った事例の一つをご紹介します。JICA ザンビアには JOCV、SV 併せて 80 人超のボランティアが活動しています。職種は教育、農業、保健、PC、コミ開、経営管理と様々ですが、各人が各々の活動を振り返り、さらにその活動を発展させるための分科会活動も盛んです。最近分科会単独の活動にとどまらず、各分科会が横の連携を図り活動の幅を拡げる試みも見られます。点（個人）の活動から、線（分科会）、そして面（協働）の活動への展開です。

ザンビアの各地で学校教員として活動している若い隊員 12 人の皆さんが、11 月 15 日にマテロ病院を訪ねて見えました。貧困や家庭環境が理由で学校に通えない、そんな子どもたちに何か自分たちに出来るものはないか、それを探るのが目的です。病院周辺のコンパウンドを歩いて回り、子どもたちと交流しました。その後、隣接するプライマリースクールを訪ねて校長と対話、最後は前もって声をかけていた学校に通えない子どもたちと病院の会議室で交流会です。本当に有意義な時間でした。

我々シニア隊員にとって「志」を同じくする若い協力隊員の皆さんとコラボできることは本当に嬉しいことです。今回の視察で、結果として何が残せたかという事より、そういう皆さんと気持ちを共有できたことがとても嬉しかったです。首都のルサカと違って若い皆さんの任地の生活環境は非常に過酷です。そんな中、この国のために若い力を注いでいる皆さんには本当に頭が下がります。日本もまだまだ捨てたものではない。「若い力」に拍手喝采、そんなひと時でした。



「雨上がりの空の下で」

「マブガブティ（おはよう）！」毎朝、自宅から配属先までの水たまりばかりの通勤路。泥だらけの子どもたちの真っ白の歯がまぶしい。ザンビアに赴任して 1 年と 4 ヶ月。どこまでも広がる大きな青いキャンパスには、白い絵の具をこぼしたような雲が広がっている。

私は今、アフリカの小さな村のヘルスセンターで働いている。病院というよりもいわば村の保健室といったところだ。この村には、電気や水道といった日本では当たり前のライフラインが存在しない。村の男手はザンビアの主食であるメイズ（トウモロコシ）やトマト、玉ねぎの世話に汗を流している。女性もまた、チテンゲというアフリカ布で赤ちゃんをおんぶし、頭に水の入ったバケツを載せ、器用に獣道をせせせと歩いている。

ある日、一人で隣の村までバイクで向かっていた時のことだ。ピクトリアフォールズに負けないような雨が突然、私を襲った。しばらく木陰で凌いでいたが、雨は、一向に止む気配がない。たまらず目の前に見えた家に助けを求めた。その家の女性は私の姿を見るや否や、外にあるたき火を中心とした台所に大きなイスを運び入れてくれた。今日の日本では、いわゆる外国人は珍しくなくなってきている。しかし、ここテレビもないような村では、異色人種の姿を初めて見る者も少なくない。それにも関わらず、彼女は見たこともない私に手を差し伸べてくれた。彼女は台所に入ると子どもをあやしめながら、いとも簡単に火を起し、雨で濡れて冷えた身体を温めてくれた。

アフリカの大地に叩きつける激しい雨は二時間もするとすっかり勢いを失い、赤土で濁った大きな水たまりには日が差している。私は彼女と子どもたちに別れを告げ、本来の目的地である隣の村へ向けハンドルを握った。ザンビアの大きな空には、それに負けないくらい大きな太陽が眩しく、木々にしがみついた水滴を照らしていた。





「笑顔の子ども達」

幼い頃、私には夢中になって見ていたテレビ番組があった。それは、アフリカの地を幼い子どもが両親と旅し、そこに住んでいる野生動物たちと仲良くなるドキュメンタリーだ。その番組をきっかけに私はアフリカに興味をもち、アフリカをテーマにした番組があると知ると、画面から離れずずっと見ていた。そんなある日、私にある1つの疑問が生まれた。

「この人たちは貧しそうなのに、なんでこんなに幸せそうなの？」

そこに映るアフリカの人々の生活は日本と比べて貧しく大変そうだった。それなのに彼らが見せる笑顔はとてもまぶしく、私はそれが羨ましかった。そしてどんどんアフリカに魅了されていった。それと同時に「アフリカの子ども達の先生になりたい。」という夢をもった。

それから25年後、私はその夢を叶えザンビア共和国に教師として派遣された。

赴任当初は異文化への戸惑いやスムーズにいかないコミュニケーションなどから「私は本当にみんなの役に立つのか」と悩み続けた。正直、つらかった。だけどそのつらさをかき消してくれたのは子ども達だった。

「先生、算数教えて。」「先生、日本語を教えて。」

子ども達にとっては「遠い日本という国から来た外国人」であった私。その私を「一人の教師」として認めてくれ、笑顔に向けてくれる。その優しさと明るさにどれだけ救われたことか。

ものが無くても学習環境が良くなくても、夢をもち、勉強に励み、毎日楽しそうに生活している子ども達を見ると「貧しさとはいったい何なのだろうか？」ということを考えさせられる。確かに経済的には貧しいかもしれない。だけど、ザンビアの子ども達は感情豊かで、人に優しく心は決して貧しくない。だからこそ、あの笑顔ができるのだ。

ザンビアに来て、私は幼い頃に抱いた疑問への1つの答えを見つけられたような気がする。



2018年度3次隊として2019年1月からザンビア共和国に派遣されています待鳥（まつとり）です。東部州チパタ郡保健局 HIV・結核プログラムで活動しています。派遣されて早10か月が経とうとしています。

水力発電に電力供給を依存しているザンビアでは、昨年の干ばつにより毎日12時間以上の停電と断水が続いています。そんな中でもザンビアの人は文句をいいながらも逞しく笑顔を保ち暮らしています。日本の安定したインフラに慣れ親しんだ自分にとってはつらいと思いきや、周りの人の優しさのおかげで楽しく生活できています。停電では天の川がきれいに見え、お湯がなくても水風呂でリフレッシュでき、ごはんが作れないなら炭で調理されたお隣さんのおすそわけで生きていけます(笑)。コンビニがどこにでもあり、水や電気も途切れない日本では自己責任、自助努力が当たり前のように思われますが、こちらでは頼りあうことに抵抗がなくのんびりとした時間が流れています。

活動に関しては、自分は郡保健局とその管轄の結核クリニックで地域における結核の予防、啓発活動に関する活動をしています。郡保健局では計画の作成と行政文書の作成補助、クリニックでは患者登録簿の入力補助と整理、データ入力・管理を主に行っています。地元のボランティアさん達と協力しつつ、地域の中で暮らす結核患者さんをサポートしていくことが自分に与えられたミッションです。現在は一年の中で最も暑い時期であり、チパタは山が多いので、自転車をこいで地域の中を走るだけでも汗だくになりますが、一生懸命働く姿を地域の人に見せることも活動だと思っているので、熱中症にならない程度に頑張りたいと思います。

日本も豪雨による被害、停電や断水などの困難が続いていると聞いています。現在の自分は駆けつけることが難しいためもどかしい思いでいます。どうか希望と笑顔を忘れず過ごせますように遠いザンビアの地から応援しています。





ザンビア

石山祐子

(2018年度4次隊 コミュニティ開発)

設立40周年おめでとうございます。いつも支援頂き、ありがとうございます。

現在、2019年の4月よりザンビアの農業事務所にて稲作の普及や野菜栽培の活動を行っております。また過去に2014年度3次隊として、ネパールにて社会的弱者のコミュニティを対象に、権利向上を目的とした活動、また公衆衛生に関する活動を行っていました。

現地住民と共に活動をして印象的であったことは、日本、日本人の特異性です。日本での常識と世界のそれとは相当な距離があるということは今も常に感じています。長年鎖国をしていた農耕民族の島国では、特殊な常識や概念が生まれるのは当然ですが、これからの日本企業の海外進出や労働力としての移民受け入れを考えると、ギャップが大きいだろうと漠然と考え込むこともありました。

まず途上国諸国は目的と手段がはっきりと分かれています。任国では手段と目的が混在するような状況は、職員のレポート作成作業くらいで、ミーティングの目的もはっきりしています。日本では手段にフォーカスしすぎて目的を忘れていた状況をよく目にしてきました。手段をも大切にするという、国が成熟した副作用なのかもしれませんが、「何のために？」と外国人労働者に聞かれて困惑する状況が多くありそうです。

そして、多様性とコミュニケーション方法についてですが、多民族国家であればそれぞれの文化や主張があり、日本人特有の「言わなくても分かる、尋ねなくても言ってくれるだろう」ではなく、「伝えないと伝わらない、質問しないと説明してくれない」が当然でした。そして外から日本を見てみると、単一国家と言われている日本が特殊で、世界のほとんどの国が多民族国家という事実にも気が付きました。変えると決心しても未だに日本特有のコミュニケーション方法を使っている自分に気が付き、習慣を変えることの難しさを再認識しますが、少しずつ変えていきたいです。



ボツワナ

安部喜敬

(2019年度8次隊 環境教育)

「2つの国を渡って見える優しさとは」

2018年7月、私はスリランカに環境教育ボランティアとして旅立ちました。そして2019年4月にスリランカで大きな事件が起きたため任国を変更することになりました。現在はアフリカのボツワナという国でボランティアを再開し、2ヶ国を経験して共通に感じたことをお話ししたいと思います。

皆さんは見知らぬ外国人が一人でいたらどうするでしょうか。声をかけますか？

気にせずに通りますか？協力隊に参加する前の私は、声をかけたことはなかったです。しかし、どちらの国でもよく声をかけられます。良い意味でも悪い意味でもです。悪い意味というのは、外国人=お金を持っていると思い、無心や客引きが多くなってしまふこと。良い意味というのは、異文化を気にせず家族のように接してくれるということです。

スリランカでは、初めて出会った人と一緒にお茶を飲み、ボツワナではバスなどの移動も気遣ってくれ、駐車場所を教えてくれたりします。

日本には“思いやり”という文化がありますが、これは直接的な親切心ではなく他人のことを慮って見えないよう付度します。一方でこれらの国では接する人、皆を家族として、ご馳走したり、結婚式に呼んだり直接的な親切心を感じます。文化的な違いがあるのでどちらの方が素晴らしいということではなく、それぞれが文化に根付く“優しさ”だと考えています。

日本式の優しさに慣れていたので、直接的な優しさがたまにお節介と感ずることもありますが、現地で右も左もわからない私に、声をかけてくれる人たちは、私にとってとても安心できる人たちとなりました。

協力隊として、現地に入って活動していかなければならないのですが、彼らに支えられ、ともに活動できています。

現在ボツワナで私は Thato と呼ばれています。Thato は現地語で愛という意味です。スリランカでもボツワナでも多くの愛をもらった私は、少しずつですが現地に愛を返しながら最後まで活動を行っていききたいと思っています。





モザンビーク

木原麻希

(2018年度4次隊 薬剤師)

私は2019年4月にモザンビークに赴任し、首都マプト市にある医療従事者養成学校に配属されています。そこで将来、薬剤師になる学生に対し、授業や実技指導、実験室の管理改善、視覚教材作成を行っています。活動を進めるにあたり、同僚に相談したり、所属長に掛け合ってみたり、活動の一部を生徒にも手伝ってもらったりと、多くの人に助けてもらいながら実施しています。

私は彼らに「いいね」と受け入れてもらい、「一緒」に活動を進めていく事を心掛け、同僚や生徒に何度か活動の趣旨を説明したり、相談する際は「どう思うか？不足はないか？」と意見を求めるようにしています。しかし、これまで彼らは「いいね」と言ってくれるものの、それ以外に得られた言葉はありません。そこで思ったのは、活動において私自身が問題・課題だと思っていることは、現地の同僚・生徒にとっては問題ではないのかもしれないということです。

実際、日常生活の中でもポイ捨て、テスト中のカンニングなどは当たり前で、「やってはいけない事」という認識はあるものの、なぜそれがいけないのか・問題なのかを理解していないことが多くあります。また、私の担当する生徒は18～30歳で20代が多いですが、初等教育・中等教育が日本に比べて整備されていないこともあり、生徒のレベルは個人差が大きいです。そんな状況の中で、当たりの事を止めさせるのは難しいかもしれませんが、まずは彼らに問題意識を持ってもらう必要性を感じています。そして彼らが自ら問題を解決できるような人になってほしいと思い、問題意識を持つきっかけ、考えるきっかけを得られるよう、工夫しながら活動を行っています。



モザンビーク

古賀美乃里

(2018年度4次隊 観光)

「いつか世界を変える力になる」まさにそうなりたいと、憧れだった途上国での国際協力の仕事。私の知識・経験を伝えたい、生徒たちに夢を与えられるきっかけになりたいと思って応募した。そして赴任したのが、モザンビークにある小さな世界遺産の島の学校だった。

この7ヶ月、ポルトガル語という言語の壁だけではなく、時間や約束は守られないこと、質の良い教育よりも私利私欲が優先されるという現実、当たり前となっているカンニング文化など、沢山のカルチャーショックを受けた。時に泣き、時に怒り、時にはあきらめた。

問題にぶつかる度、声をあげるも変わらない環境に「自分の無力さ」を痛感した。それでも私にできることを模索し取り組む中で、生徒達から「先生の授業が好き」「土曜日にも補講をしてほしい」という言葉をもらえるようになった。前のめりになってノートをとる生徒の姿に胸が熱くなったこともある。

同僚から「彼女は時間を守るから僕たちも守るべきだ」「彼女がしたいなら応援しよう」という声があがるようになった。まだまだ私が「変える」ことができるのは大したことではない。1%にも満たないだろう。だがこうやって私の周りの小さな世界に少しでも影響を与えられているのであれば、私がここで2年間奮闘する意義があるのではと思えるようになった。そして私の「世界」も変わりつつある。ここモザンビークではどれだけ待たされようが怒らない。バスの隣の人とはたちまち仲良くなる。自分のものも分け与える文化がある。「私の家族」と友人であっても家族同様に大切にする。見知らぬ私が困っていると助けようと手を差し伸べてくれる。最初は戸惑ったこの優しさも、今では躊躇う自分や日本が恥ずかしくなるくらい素敵だと思える。モザンビークなどの途上国から日本が学ぶべきことを代表で学び、帰国後、日本という「世界」をも変えるきっかけにすることもできるのが協力隊員だと考えさせられる。



西部ガスエネルギーグループ
株式会社 サンケイガス
 TEL 092-947-0291

LANDIC GROUP

LIFE DESIGN DEVELOPER

人と街を発想とデザインとで繋ぎ、素敵な場所、そして時を創造する。

株式会社 **LANDIC** ホールディングス

株式会社 **LANDIC**

FUKUOKA HEAD OFFICE

〒810-0801
 福岡市博多区中洲5-3-8 アクア博多6F
 TEL : 092-283-3200
 FAX : 092-283-3205

TOKYO OFFICE

〒107-0052
 東京都港区赤坂9丁目7番2号
 東京ミッドタウン・レジデンシイズ2302
 TEL : 03-6905-9584
 FAX : 03-6905-9589

株式会社 **LANDIC** リアルティ

FUKUOKA HEAD OFFICE

TOKYO BRANCH
 OSAKA BRANCH
 NAGOYA BRANCH
 SAPPORO BRANCH



「ありがとう」と言われる薬局をめざして。



オーエス薬局グループ

www.osinc.co.jp



自動販売機の設置及び修理・一般貨物自動車運送及び倉庫業

株式会社平正技研サービス

〒811-2108 福岡県糟屋郡宇美町ゆりが丘 2-6-2

明治元年創業



岩崎建設株式会社

取締役社長 岩崎 成敏

福岡市中央区西中洲12番25号

TEL (092) 751-9601 (代表)

FAX (092) 751-9830

 総合メディカルホールディングス株式会社

 総合メディカルホールディングス株式会社

坂本歯科医院

日本補綴歯科学会専門医・指導医
博多メディカル専門学校講師



歯学博士 坂本文比古

〒812-0063 福岡市東区原田1丁目3-10
TEL (092) 611-0623
FAX (092) 622-6293
E-mail: sakamotoshika@tempo.ocn.ne.jp



診療時間
(平日) AM 9:00
~PM 7:00
但し木曜は
~PM 6:00
(土曜) AM 9:00
~PM 4:00
但し急患の方は
この限りではありません
西鉄バス
⑦④・⑦⑦・⑦⑨
原田バス停前
JR九州バス
箱崎原田バス停前



えすぺらんざは
青年海外協力隊を
応援しています!



青年海外協力隊 OB が 2005 年に開設した、不登校の子どもたちの居場所です。是非遊びに来てください!

〒812-0053 福岡市東区箱崎 3-18-8 電話 092-643-8615 Mail : info@esperanzahp.jp

URL: <http://www.esperanzahp.jp/>

福岡県青年海外協力隊を支援する会

私達はJICA海外協力隊事業及び協力隊員の活動を充実させるための県民運動を展開し推進しています。

福岡県知事表敬訪問



福岡県出身の隊員の皆さんが抱負や活動について報告

沿革

- 1978年 福岡県協力隊を育てる会発足
- 1992年 青年海外協力隊ゼミナール開催
- 1998年 福岡県協力隊を育てる会設立20周年記念講演・式典・交流懇親会開催
- 2008年 福岡県協力隊を育てる会設立30周年記念講演・式典・交流懇親会開催
- 2009年 福岡県青年海外協力隊を支援する会に名称変更
- 2020年 福岡県青年海外協力隊を支援する会設立40周年記念式典開催

主な活動

自治体表敬訪問



出発隊員、帰国隊員の自治体表敬訪問同行

新隊員の壮行会



出発隊員への激励と
帰国隊員への慰労

家族連絡会



派遣中の隊員のご家族へのJICA事業説明、近況報告と
家族間交流懇談会



その他

- ・クロスロードの配布
(JICA海外協力隊の活動誌)
- ・育てる会ニュースの配布
- ・小さなハートプロジェクト
(活動中の隊員への資金支援の実施)



独立行政法人 国際協力機構 九州センター

～世界で役立つ 九州が役立つ～



<拠点情報>

住所

〒805-8505

福岡県北九州市八幡東区平野 2-2-1

電場番号

093-671-6311(代表)

アクセス

JR 鹿児島本線 八幡駅徒歩 10分

JICA九州ホームページ

QRコード



<JICA九州のご案内>

JICA九州は、九州地域における国際協力の窓口及び研修員受入れのセンターとして北九州市の八幡国際村に設置され30年が経ちました。みなさんが誰でも利用できる国際協力のためのオープンスペースとして、様々な事業を行っています。

多くの市民のみなさんが訪れ、開発途上国や国際協力への興味、共感を育む場として、JICAや九州全域で国際協力に関わる団体の情報発信の場として活用して頂くことを目指しています。

また、年間900名を超える開発途上国からの研修員受入れ及び様々な研修コースを実施しています。そんな世界各国の人々と市民の皆さんをつなぐ架け橋になりたいと思っています！



JICA九州の取り組み とSDGs (事業案内)

1. 研修員受入

九州の「知」と「技」を世界へ。

アフリカ、アジア、中南米など約100ヶ国の国づくりを担う方々に、環境、保健、教育、農業、産業など九州が有する知見・技術を伝えています。1989年～2018年度末までにのべ約20,000名を受け入れました。



4. ボランティア派遣

九州のひとの想いと力が世界を変える

途上国の課題解決に共に取り組むために必要な知識、経験を有する人材をJICA海外協力隊として、九州から累計で98ヶ国、約6,500名派遣してきました。JICA九州では主に協力隊の募集活動や、帰国後の進路支援を行っています。



2. 草の根技術協力

海外で生きる、九州の経験

九州の自治体や大学、NGOの知識、経験を活かした途上国への支援事業の形成・実施を支援しています。これらの事業は主に途上国における生活改善・生計向上などに貢献しています。



5. 開発教育支援

世界の「いま」を見る・知る・学ぶ

出前講座やセンター訪問、研修員の学校訪問などを実施しています。途上国の現状やボランティアの活動内容などを児童、生徒、学生たちに伝えています。年間約1,460名以上がJICA九州を訪問しています。また、高校生実体験プログラム、教師海外研修や開発教育指導者研修等の研修プログラムも実施しています。



3. 中小企業 / SDGsビジネス支援

九州の地元企業の海外展開を

九州の企業の海外展開を通じて、企業が有する製品・技術による途上国の課題解決を目指しています。個別相談から実証・普及に向けた調査まで幅広いメニューで海外展開を支援しています。



地域に根差したJICA九州を目指して ～地域清掃活動をおこなっています～

JICA九州では、JICA研修員や地域の有志の方と共にセンター周辺の清掃活動を行っています。

「世界で役立つ九州が役立つ!」をモットーに地域に開かれたセンターを目指します!



福岡県青年海外協力隊を支援する会 設立40周年記念事業



会場へのアクセス

- 西鉄電車
福岡天神駅から徒歩5分
- 西鉄バス
天神大丸前から徒歩1分
西鉄バスターミナル前から徒歩4分
- 福岡市地下鉄
空港線 天神駅から徒歩6分
七隈線 天神南駅から徒歩2分



主催：福岡県青年海外協力隊を支援する会
共催：JICA 九州 NPO 九州海外協力協会

福岡県青年海外協力協会

(お問い合わせ先) 支援する会40周年記念事業実行委員会 事務局 TEL: 092-753-8877 FAX: 092-753-8870